ザ・キャラクター

野田秀樹

マドロミ　サイレンが街中に鳴り響くたび、しがみついてきた幼い俤……俤の中にいるのは弟。儚さの中にあるのは夢。弟の俤は夢で儚く、ただ見えてくるのは、しがみつく弟の指。『空から落ちそうだ』細く白く幼い指がそう言う。『今どこにいるの？』『だから空だよ』『空だけじゃ分からないよ。今助けに行くから。どこの空？　うわの空？　秋の空？』『雲居の空さ』『雲があるの？』『空だもの』『つらそうね』『そらそうだ』弟の俤が笑う。笑い声が滴に変わる。指の隙間から滴が零れ落ちる。笑い声は涙だった。『姉さん、雲をつかみ過ぎた。ちぎれる。真綿の雲がちぎれる』馬鹿ね、それは雲なんかじゃないよ、私の袖……え？　どうしたの？……ちぎれていく。私の袖がちぎれていく（袖が長々と音を立ててちぎれていく）……落ちる。弟が落ちる……弟の俤が落ちていく。

何の変哲もなく見える町の書道教室。
中央で書を書いているものが数名。
端で、墨を磨っている人間たちが二、三十人いる。中心に、古神筆の助がいる。

古神　心臓に……魂は……ない！　人間を腑分けし、心臓を取り出して初めて、人はそのことを知った。だから、文字も腑分けするがいい。人が山にいるので『仙』人。人が木にもたれて『休』む。人に武士が『仕』え、犬がひれ『伏』し、主となって『住』む。腑分けしてはじめて、文字の魂も見えてくる。家元のオコトバだ。

オバちゃん　大家さん『仇』という文字は、なぜ仇？

古神　仇を腑分けすれば、人に九。それで仇……。

オバちゃん　だからなんで、人が九で仇？

古神　やられたあ！　キュー……仇っぽいよね。

オバちゃん　大家さん、それじゃ答えになってな……。

会計　（遠くから）呼び間違えてるよ。古神さんは、大家さんじゃないから。

オバちゃん　でも入会案内には、初級者は通い、中級者は住み込み、上級者は大家と呼ばれると。

会計　大家だから。

オバちゃん　だったら尚更、なぜ人に九で……。

古神　（さえぎって）今日の墨磨りは、そこまで。

生徒たち　ありがとうございました。

会計　じゃあ、今日磨った分の墨代を払って帰って。

墨を磨っていた十数名が、感謝の言葉を述べながら出口から出ていく。

オバちゃん　え？　今日は、墨を磨るだけなんですか？

会計　あなたは初心者？

オバちゃん　今日入会したばかりです。

会計　初心者は、部屋の隅で墨を磨ってね。しかもミスなく墨を磨ってね。これ、料理で言えば、マゴつかず胡麻をするってことだから。そしてどこの世界でも胡麻をすれば、その道の七割歩んだも同じ。わかるよね。

生徒1　居残り、お願いします！

七、八名、大急ぎで戻ってくる。

会計　ほら、まだ墨を磨りたくて居残りを志願する人だっているよ。

オバちゃん　じゃあ、あたしも居残りをお願いします。

会計　じゃあって。

古神　居残った君たちに、特別、チャンスという名の半紙をあげよう。

会計　（遠くから）あ、半紙代も書いた分だけ必ず払って。

古神　通いから住み込みになるための特練をおこなう。窓閉めて。扉も閉めて。

窓や扉が閉められ、カーテンが閉じられ秘密めいてくる。

生徒1　何を書けばいいんですか？

古神　自分の名前を書けばよろしい。

生徒1　あれ？　先に字が書かれています。

古神　家元が手本で書かれたお言葉だ。

生徒2　甲は乙に無償で当該不動産を……。

古神　読むな、ただその横に名前を書くのみ。

オバちゃん　でも、この人、このまま名前を書くと、なにかにサインをすることになりません？

新人　ただ書けよ。書くことでしか僕らは救われないんだ。書く、書き、書け、書こ、過去を書こう。

生徒たち　書く、書き、書け、書こ、過去を書こう。

新人　書くことで、ただひたすら書くことで立ち直ろう僕たち。立ち直ろう世界。

生徒たち　立ち直ろう僕たち。立ち直ろう世界。

古神　君、いいなあ。

新人　いえ、家元の受け売りです。

古神　そう！　君たちは病んでいる。病んでいる者だけがここにいる。ここは魔の山。だから書くんだ。健康な人間などここには要らない！　ほら、見ろ。（生徒2が書いているものを取り上げて）これが、病んでいない傲慢な文字だ。偉そうだ、威張ってる、書き直せ。

生徒2　自分、威張ってました！

古神　だったら何十枚も何百枚も、手首が折れるまで、名を書くがいい。

生徒十人　（手を挙げて）手首を折ります。

古神　複雑に折れ。

生徒五人、手を下げる。

残った生徒五人　（手を挙げたまま）ボルトだって入れます。

古神　骨粗鬆症にもなれ。

生徒四人、手を下げる。

新人　（一人、最後まで手を挙げ）骨粗鬆症にだってなってみせます。

古神　君が気に入った。君は今日からここに住み込みなさい。

新人　本当ですか！？　住み込んでいいんですか？

古神　その免状代わりに、君に見せてあげよう。

新人　何をですか？

古神　家元が私に書いてくださった私の座右（ざゆう）の銘だ。

新人　そんな大切なものを。

古神　見るだけだよ。

新人　声を出して読んでもいいですか？

古神　声を出すだけだよ。

新人　『物忘れ』……魂が震えます。

古神　家元の文字をなぞる時に感じるこの筆先の触感、心震えろのエロス、感じるか？

生徒1　感じます。

古神　感じたら信じろ。

生徒2　信じます。

古神　信じたら黙って名を書け。

オバちゃん　名前を書いたら家元に会えるの？

古神　それは時の運。

オバちゃん　家元のツラが見たい。

会計　ツラって言った！？

オバちゃん　いえ、そのお顔を見るためにここに来ました。みすみす、墨なんか磨っている場合じゃないの。ほら、例のあれを見せてよ。

会計　例の、あれ？

オバちゃん　念写とかいうのをやって生徒を集めてきたんだろう？
古神　心の念が文字となり、紙のうえに現れる。それは、家元の能力の一部に過ぎません。
生徒３　また念写を見せてください。
生徒１　僕もそれが見たいです。
新人　出来れば僕も家元の念写が見たい。

生徒たちが見たい見たいと騒ぎ出す。

古神　家元は、念写を封印なされた。凡人には推し量りがたいエネルギーが必要なんだ。
新人　じゃあもう二度とおやりにならないのですか？
古神　時が来れば、またなされる。
会計　兎に角、今、家元は、『一枚の紙なのに何故、半紙？』という新たなる悩みにぶつかり修行の途につかれています。
古神　今度お姿を現すのは、しし座流星群が大量に現れる……お帰りなさい、家元。

見れば家元と家元夫人が、大きなスーツケースを持って、首にレイなどをかけて、ただの観光客のような軽い感じで現れる。

家元　ただいま～。
家元夫人　やっぱりおうちが一番だわ。

その場にいる者、皆が緊張する。
沈黙。

古神　粛々と、家元の第一声をお待ち申し上げております。
家元　あれ？　ただいまとは言ったつもりだけど。

古神　その次のコトバをです。何を頂けるのでしょうか？
オバちゃん　ツラ見せたんだから、なんか喋んなよ！
会計　お前失礼だよ。
オバちゃん　ごめんなさい。そのツラ見たら、思わずツラって言いたくなっちゃって。
会計　出て行って！　退会処分だ。
オバちゃん　今日入会したばかりだよ！
会計　失せろ！
オバちゃん　（連れ出されながら）もうツラって言わないから……（外から）畜生！　見せてみろよ、その魂の震えろのエロスとかもろもろ、せっかくツラ見せたんだからさ！

オバちゃん、連れ去られる。

家元夫人　誰？　あれ？
会計　入会から退会するまでの記録保持者です。
古神　家元、海外にいってらしたのですか？
家元　あ、でもハワイとかじゃないよ。こう見えても海外修行だよ。
家元夫人　じゃあ、お土産を渡すわね。でいいかしらあなた。
家元　いいね。
会計　なんですか、これ。
家元　世界中で買ってきた。半紙だ。
家元夫人　これが中国の和紙。
古神　中国の和食みたいなことですか？
家元夫人　これがアラブの油紙、イスラエルのわしづ紙、インドの一匹オオ紙、ローマのひとつ紙、ブラジルの送りおお紙、アフリカのハニ紙、ロシアのヤッ紙。

家元　こうして世界中で、わしの魂にしっくりくる紙を探し求め、そして見つけた。
古神　どこの紙が一番しっくりと？
家元　やっぱりギリシアだね。ギリシアの紙だね。
古神　やっぱりそうでしたか。
家元　そこでは、大理石も海も羊のように縮れていた。ジャン・コクトー。
会計　トランクから突き出しているそれは？
家元　『時間』と呼んでいいんじゃないかな。
家元夫人　ギリシアの街角で見つけたのよね。
家元　大きくてのっぽで古いやつだ。
古神　土産も結構ですが、土産話の方も頂戴したく思います。
家元　ああ、話。そっちね。……それがね、どこへいっても、ただならぬ私って、ばれちゃったんだろうな、私の周りに人々が近寄ってきてね。
家元夫人　ほらこれがその時の写真。
会計　うわあ、誰ですか？　この汚い西洋人たち。
家元夫人　ホームレスよ。
会計　ホームレスと一緒に写真撮ってきたんですか？
家元夫人　だって、群がってくるから、家元に。
家元　縋（すが）ってくるんだよ。『殺してくれ。そしてわたしを変えてくれ！』って。
アルゴス　それで、殺して差し上げたんですか？

部屋の隅。地下に続く扉の前で、じっとしていたアルゴスが初めて口を開く。

家元　え？　なに？
アルゴス　殺せと頼まれたから、殺したんですかって聞いているんです。
家元　何を聞いていたのかな？　殺せなんて言ってないでしょ。そんなこと言う奴がいる？

アルゴス　ですよね。

奇妙な様子の家元に驚く人々。

家元夫人　（家元に）……あなた？

古神　家元も長い修行でお疲れだ。

会計　これ以上の話は、素人には耳に毒です。

古神　住み込みの者は自室修練！　通いの者は帰宅修練！

人々、三々五々に帰る。あるいは、いくつもの扉の中へ入っていく。

新人　今のホームレスの話、ちょっと変ですよね。

家元　君、誰？

古神　今日から住み込むことになりました……。

家元　わしと直接喋っていいような、あれか？

古神　かなり、来てます。

家元　そうか、おいで。で……どこが変？　私のお話、どこが変？

新人　あの……そのホームレスたちは、日本語で殺してくれと言ってきたんですか？　ギリシアなのに。

家元　もちろん英語だ。

古神　ギリシアなのに？

家元　ギリシア英語だ。

新人　ホームレスは何と？

家元　Kill me...Change。キルミー。殺せ、そして、チェインジ。

新人　それ、ギブミーチェインジじゃないですか？

家元　え？

新人　ギブミーチェインジ。小銭をくれ、って近寄ってきたんですよ、ホームレスが。

家元　……。

会計　え？　あ、そうじゃない？

新人　そうですよ。

家元夫人　そうよ。

家元　そうだよ。ギブミーチェインジ、そう言ったよ、わしは。

新人　いえ、キルミーって。

家元　え？　誰が？　何が？　キルミー？　殺せ！　なんていう奴いる？　ギブミーだよ。ギブミーチェインジ。わたしに変化をちょうだいって言ったんだよ。

新人　『小銭をちょうだい』じゃないですか？

家元　チェインジは変化だろう。

新人　でも小銭という意味も……。

家元　じゃあ、顔の黒い合衆国の大統領は、小銭！　小銭！　って叫んだのか？

新人　いや、あのチェインジは。

家元　変化だよ。それでわしは目覚めたわけだ。いよいよ、チェインジだなって。

家元夫人　そこでこれよ。

古神　ギリシアの紙が何か。

家元　一枚じゃない、ギリシアの紙々だ。

何の事だか、ぼうっとしている。

家元夫人　あれ？　ご存じない？　ギリシアは、（蜘蛛と書かれた半紙を見せ）蜘蛛にチェインジした女。（糸杉と書かれた半紙を見せ）糸杉にチェインジした少年。蝉にチェインジした美青年。蝙蝠にチェインジしたなんたらかんたら、そういう、チェインジに富んだ？　でいいかしら？

家元　ああいいよ。
家元夫人　そうした移ろいやすい世界なの。
会計　それは、ただの神話のハナシじゃないんですか？
家元・家元夫人　ただの、じゃねえよ！　ただのとかふざけたこと言ってんじゃねえよ！……。

その力に押されて沈黙。

古神　……家元のおっしゃられんことを聞こう。
家元　わかるかな？……。
アルゴス　（家元の言葉を取って）今にもそこで殺されそうな思いが、何かに姿を変え、そうして生き続けているカミガミの世界、ギリシア。そこでは、夜空に光る星でさえ、殺されかけた母と子の救われた姿だったりするんだ。
家元　……するんだ。
新人　大熊座と小熊座のことですか？
家元　え？　知ってた？
会計　ガイドブックか何かに書かれていたんじゃないんですか？
家元　それはある意味、図星という別の星座だね。でもまあ、言ってみれば、人が星に変わるっていうのは、なんつうかな、変わり者？　によって作られている世界なんだ。
家元夫人　だからみんなも、負けちゃだめよ。
家元　そういうことだから、今日からはみんな変わってくれ。
古神　変わってくれとは？
家元　変わり者になるんだ。いいね。
古神　待ってください。私はかなり常識的に生きてきたんですよ。
家元　そう、私も常識はある。ありすぎる。アリとキリギリス。そのどちらを常識と呼ぶかだけどね。
古神　え？　え？　え？　どちらをって言うと？

新人　すると、この書道教室も、変わることになるんですかね。
家元夫人　はい！　ということで今日はお開き～、お休み～。
新人　でもまだ子供が寝る時間です。
家元夫人　これからは、時間で暮らすの、でよかったかしら？
家元　うん、いいね。
新人　だったら、ギリシアは今は朝です。時差は七時間ですから。
家元　古代ギリシアとの時差は、2628万8467時間ある！

奥へ去る家元と家元夫人。

会計　でも何で急に古代ギリシア時間で暮らさなくちゃいけないんだよ？
古神　知るか。そこからもう後戻りはできないってことだ。わかるだろう？　俺も大家（おおや）じゃなくて、もう大家（たいか）なんだから。事が起こってしまったんだから。
会計　……あっ。
新人　事って？
古神　ううん……降りてきちゃったんじゃないか？　家元に。ゼウスのようなものが。
新人　え？　ゼウスじゃないんですか？
古神　まだわからないだろう。ゼウスっぽい何かだ。まだ、一枚の羊膜のようなものだから。ゼウスっぽいものは。
新人　どういうことですか？

誰もいなくなる。
依然としてただ一人、アルゴスが地下への扉の前に座っている。

三人のキューピッドのようなものが、ギリシア帰りのトランクの中から現れる。

『時間』と呼ばれたものを、えも言われぬ燦(きら)めきの中で、引っ張り出す。
キューピッドのようなものは、黄金の矢と鉛の矢とを背中にしょっている。
大きなのっぽの古い『時間』の後ろから、マドロミが現れる。手には蠟燭を持っている。

キューピッド1　あれ？　見かけない顔だな。
キューピッド2　どこから来た？
マドロミ　私、たぶん、この時間の裏側で眠っていたんだと思います。
キューピッド1　何かのはずみで押し出されたのか？
キューピッド2　押してみろ。
キューピッド3　（時計の後ろの空間を押す）……だめだ。もう、何も出てこない。

マドロミが、うっかりキューピッドの肩に蠟燭を垂らす。

キューピッド1　あつい！　なんで俺にローソク垂らすんだよ！
マドロミ　やっぱりあつい？
キューピッド1　火傷(やけど)するだろうがよー。
マドロミ　でも、ローソクの蝋って火傷しそうで火傷しませんよね。
キューピッド1　そうか？
マドロミ　ほら。
キューピッド1　あついって！
アルゴス　お前たち、さっきから何してんだ？
キューピッド1　え？　見えてた？
アルゴス　何を引っ張り出したんだ？
キューピッド1　大きなのっぽの古時計だよ。

キューピッド２　おじいさんの時計だ。
アルゴス　どこのおじいさんだ？
キューピッド２　知らねえよ、アプロディーテーから言われたとおりにやっているだけだ。
キューピッド３　髪型だって、言われた通りにアフロさ。
アルゴス　……。（見れば、キューピッドらはアフロ）
キューピッド１　俺たちが見えるって、ただ者じゃないね。
キューピッド２　誰？　なんていうの？
アルゴス　アルゴス。
キューピッド１　へえ、あんたが……百の目玉を持つとかいう、あの化け物か。
キューピッド２　でもって、目玉が代わり番こに眠るんだろ、だから不眠不休で見張り番ができるんでしょ。
キューピッド１　ね、誰を見張ってんの？
キューピッド３　どこにあんの？　目玉。百個も。
キューピッド２　すごいよね、見せて。
アルゴス　仕事が終わったら、さっさと消えろ。
キューピッド１・２・３　あ、はーい。

キューピッドの背中のそれぞれの矢が、その古時計の長針、短針となる。
三人、地面の下に消える。
……が、マドロミは消えない。

アルゴス　消えろって言っただろ。
マドロミ　はい？
アルゴス　何してんだよ。
マドロミ　あなたこそ、何してたの？

アルゴス　え？
マドロミ　一人で何をブツブツ言っていたの？
アルゴス　あなたは、俺の幻覚じゃないのか。
マドロミ　そうですか……幻は見る者によって見えてくるのか、見せる者によって見えてくるのか、という問題ですよね。
アルゴス　ここでは、誰も俺に話しかけてこない。
マドロミ　私が話しかけてます。
アルゴス　俺の声は聞こえないことになっている。
マドロミ　私には聞こえます。
アルゴス　みんなで俺を無視している。たぶんこれは永遠の拷問だ。俺が話そうとすると相手が聞いてくれない。相手がやっと話しかけてくると俺の耳に声が届かなくなる。
マドロミ　あれですね。のどが渇く。目の前に満々と水をたたえた池がある。だのに飲もうとするたび、水がさあっと引いていく。あれね。

不意にマドロミの背後から、あのオバちゃんが、現れる。
アルゴス消える。

オバちゃん　何してんの？
マドロミ　え？
オバちゃん　一人で何をブツブツ言っているの？
マドロミ　え？　何か？
オバちゃん　いや、何かじゃなくて、何をしているの？
マドロミ　本当に何も。
オバちゃん　でも少なくとも、蝋燭は持っているわよね。そして垂れているわよね。それって、夢を見て枕に涎を垂らしていた時みたいな恥ずかしさよね。
マドロミ　そこまで言われると少し恥ずかしくなりました。

オバちゃん　もしかしたら、あたしのお仲間じゃないかしら。
マドロミ　絶対に違うと思います。
オバちゃん　あたしにはわかるの。あなたと私は全く同じよ。
マドロミ　まったく違います。
オバちゃん　被害者よ。
マドロミ　被害者？
オバちゃん　だったらなんで、蠟燭なんか持っているの？
マドロミ　いえ、キューピッドのことを考えていたんです。
オバちゃん　ちょっと待って、大丈夫？
マドロミ　いや、あたしは大丈夫なんです。
オバちゃん　じゃあ、誰が大丈夫じゃないの？
マドロミ　キューピッドです。
オバちゃん　見て、私の目を見て！
マドロミ　そんな目は見れません。見たこともありません。見たくもありません。
オバちゃん　そうでしょうね。これが、現実というモノの目です。子供を探している母の目なんです。
マドロミ　どういうことです？
オバちゃん　息子がね、この書道教室に通いつめた揚句、行方不明になっているんですよ。
マドロミ　え？
オバちゃん　きっと、息子が騙されたんです。わけのわからないうちに自宅が抵当に入っていました。不動産の契約書に自筆でサインしてしまって……。目星はついてます。自分の名前を書く稽古とか言われて、気がついたら丸裸ですよ。しかも逃げられないんです。見張られているから。ここに住みついた者たちはみんな。
マドロミ　あなたも住みついているんですか？
オバちゃん　わたしは今日入会しました。そして今日退会させられました。新記録です。でももう決心しました。
マドロミ　なにを？

オバちゃん　誰かをここから救い出したいのなら、どんな手を使ってでも中へ入り込むのよ。
マドロミ　あなたはお入りにならないんですか？
オバちゃん　私は目をつけられちゃったから駄目。この目が駄目なの。駄目でしょう？　現実がはみ出しているでしょう？
マドロミ　そう言えば、すこし。
オバちゃん　え？　はみ出してる？　気になるじゃない。

奥で携帯電話をかける音がする。
その音に気がついて、オバちゃんは、外へ逃げる。
マドロミは部屋の物陰に隠れる。
会計が携帯を片手に出てくる。

会計　あの、もしもし、夜分遅くにすいません。あの悪戯じゃないですから。最後まで聞いてください。あのもしも、人を殺す現場にいて、あのその後で自首っていうか、え？　いえ、あの見たわけじゃないです。ただの興味です。あ、でも悪戯でもないんです。そういう場合に、なんていうのかな、自首みたいなことをしたら、罪は軽くなるんでしょうか。いえ、あの殺したわけじゃなくて、見えちゃったというか。いえだから。罪が軽くなるかって、それを聞いてんだよ、てめえ！……あ、すいません。え？　たぶんとか言うのやめて、はっきり、軽くなるならなるって言えよ、てめえ！　こっちも必死で……え？……なる！

マドロミに気がつく会計。

会計　誰？　君は？　今、何か見た？　何か聞いた？　何か感じた？　もろもろのこと。
マドロミ　いいえ、何も。
会計　じゃあ、ここで何をしていたの？
マドロミ　何も。
会計　何もしてないわけないよね、真夜中だし、他人様の家だし、あんた知らない人だし。

マドロミ　……あの、弟を知りませんか？
会計　ここに住み込んでいるの？
マドロミ　いいえ、弟がここらあたりに落ちたと思うんです。
会計　落ちた？　何が？
マドロミ　だから弟です。
会計　ごめんなさい。わたしは寝ぼけてるのかな。
マドロミ　ほら、私の袖がちぎれているでしょう？
会計　は？　は！？　ははあ！！！？

その声に驚いて、奥から、家元と家元夫人と古神が出てくる。

家元夫人　今何時だと思ってるの？　古代ギリシア時間的に。
古神　どうしたんだ？
会計　気持ちのよさそうな女が気持ちの悪いことを言ってるんです。
マドロミ　弟が落ちたんです。ここら辺に。

間。

古神　は！？　は！？　はあ！？？
会計　ほらね、気持ち悪いでしょ。（うなじを見て）ここら辺、気持ちよさそうなのに。
家元　人は落ちませんよ。落ちるのは雷です。
家元夫人　弟さんを探している……みたいなことじゃないかしら？
古神　どんな弟？
マドロミ　若くて貧しい。

古神　貧しいの、貧乏なの！？　じゃあいない。ここには、豊かな人しかいません。
家元　さ、これをあげるから、お帰りなさい。
マドロミ　なんで『私』って書かれているんですか？
家元　世界中に通用するお金です。私の手書です。単位は『私』です。一『私』で、大体五万円ぐらいです。
マドロミ　この絵になっている太って汚い男はだれですか？

場が凍りつく。

家元　だから、私ですが……何か？
マドロミ　（しげしげと実物を見て）あ、ホントだ。そう……じゃあ。
古神　さ、もう、いいね。ここには弟さんはいない。どこか、他の所に落ちたんだよ、きっと。歌舞伎町の明け方とかリオデジャネイロの夜とか、人が落ちていくところは他にも沢山あるから。
マドロミ　弟は帰って来るんですか？
家元夫人　帰ってきますよ。もう帰っているかも。家に帰った方がいいわよ。
マドロミ　でも、海の夫人だって、結局、海には帰らなかったでしょう？
家元夫人　さあ、そんな人、私たちなおさら知らないから。
マドロミ　知るも知らないも、海の夫人も弟も実在しないんです。
家元夫人　え？
マドロミ　はい。
会計　あれえ？　今なんて言ったのかな。
マドロミ　海の夫人は作り話だって。
会計　いや、弟も作り話だって言いませんでした？
マドロミ　弟なんていないんです。
会計　どういうこと？　いないのに探してるの？

古神　それだめだろう。元々持っていない一億円を探して銀行の窓口に行って、一億円を返してください、って言ってるようなもんだよ。今のたとえでいいですか？

家元　なってないな。

新人　もともと持っていない二億円を探して信用金庫の窓口に行って、二億円を返してくださいって言っているようなものですかね。

家元　新人いいな。

マドロミ　でも、いないから探しているんです。弟なんていないのに、俤ばかりが夢に出てくる儚げに。何と呼べばいいのでしょう、この曖昧な確信。ぼんやり？　じんわり？

家元　そういうことだったら、ここに住み込みなさい。

一同　え！？

家元夫人　いきなり住み込ませるの！？　ちょっとばかり綺麗だからって。

家元　私が探してさしあげましょう。この世にいない弟さんを。新人！　墨を磨れ。

新人　はい。

家元　ここにはね、いつもあなたのように病んで病んで病んで救いを求め、逃げ込んでくる。どこから？　過去から。その過去を書こう。書か、書き、書く、書け、過去を書こう。

新人　きっと、家元が吸い寄せるんでしょうね。

家元　（古神に聞く）僕の何が吸い寄せるんだろう？

古神　（うまいこと言おうとするが出ない）……。

新人　魅力？

家元　（嬉しそうな顔をする）

新人、墨を磨る。古神、慌てて大きな筆と大きな半紙の用意。

その間、家元、精神統一をする。

会計と家元夫人、マドロミを別のところへ連れて行き、

会計　ほら、こっちきて、住み込みの手続きをするから。
家元夫人　いきなり住み込みだわ。
会計　早く座って。
マドロミ　どこに？
会計　好きなところに。
マドロミ　はい。

四つある椅子を無視して、マドロミ、窓枠に座る。

家元夫人　ふつう、椅子に座らない？
マドロミ　でも好きなところと言われたから。
家元夫人　ベルリンで天使の詩（うた）とか歌ってたんじゃないの？
古神　さ、自分の名前を書いて。
マドロミ　甲は乙に当該不動産、ならび、全ての財産金銭を……。
古神　ただ、ひたすら名前を書く。
マドロミ　私、もう何も持っていないんです、この世には、たぶん。
家元夫人　（書かれた名を読み）マドロミ？　いやな名前ね。
マドロミ　なんだか、まどろんでいたい。きっといつまでも目を覚ましたくなんかないんです。
会計　いますね。こういうわがままな女。たいして仕事もできないのに。
マドロミ　たとえば、こんな窓でまどろむと……。

一枚のくしゃくしゃの半紙をふところから出す。『儚さ』と書かれている。

マドロミ　儚さの中に夢がある……。

一本の手が窓の外から現れて、マドロミのちぎれた袖をつかむ。
それを引っ張り上げるマドロミ。それはアルゴス。

アルゴス　し！
マドロミ　あの時、私の袖をちぎったのはあなた？
アルゴス　袖？　知らないな。でもその紙にはサインしない方がいい。
マドロミ　どうして？
アルゴス　ここには住みつくな。
マドロミ　誰なの？
アルゴス　僕は、ここでただ一人『まっとう』といえる男。
マドロミ　でも今どこにいたの？
アルゴス　窓の外にぶら下がっていた。だらあんと。
マドロミ　それ、まっとうな人間がやることじゃないでしょ。
アルゴス　心の中にあるのは？
マドロミ　葛藤？
アルゴス　朝の食卓にあるのは？
マドロミ　なっとう？
アルゴス　じゃあ今ここにいるのは。
マドロミ　まっとう。
アルゴス　ね。
マドロミ　ね、じゃないわ。まっとうな人間がやる誘導尋問じゃないわ。
アルゴス　でも信じた方がいい。
マドロミ　なんで。

アルゴス　今のコトバは全部、あなたの弟に言ったコトバさ。
マドロミ　弟を知っているの？
アルゴス　その末路もね。
マドロミ　末路って何？
アルゴス　この鎖の先に、その末路がつながっていた。この鎖の先を知りたいんだろう？　僕は止めたんだ。でも、あいつは落ちて行った。
マドロミ　落ちていく姿を見たの？
アルゴス　ここではね、他人が罪を犯す姿を、わざと見せる。目撃させる。そして誰も……止められない。
マドロミ　止められない？
アルゴス　その場になったらわかる。止められないんだ。だから、一緒に罪を犯したも同じ。そんな気持ちになる。ここに住みつく者はみな共犯者。それでも住みつくのかい？
新人　墨の支度ができました！

その声で、マドロミ、まどろみから覚める。

家元　その姿なき声から救われたいんだね。
マドロミ　え？
家元　『救』いの中には『求』めがある。
マドロミ　え？
家元　そしてその救われたい『魂』の中に『鬼』が棲む。
古神　家元がおっしゃっているのは、あなたの病んだ魂を救うために、ひと文字書いて差し上げると……。
会計　こんなこと、まずあり得ないんですよ。（うなじを見て）ちょっとばかり、ここら辺が気持ちよさそうだからなんですよ。
古神　私も昔『物忘れ』に病んでいた。
新人　それであの座右の銘ですか。
古神　え？　君に見せたっけ。

新人　はい、『物忘れ』。
古神　そうだっけ、ま、何にせよ効果覿面（てきめん）だ。
家元　どんな文字を差し上げましょうか？
マドロミ　だったら、幻の弟のその俤が夢で儚げに、ちぎっていった『袖』という文字を書いていただけますか？
家元　袖だけでいいの？
マドロミ　はい、ちぎれた袖を。
家元　わかりました。

古神が、墨の入ったバケツを持つ。

家元　わりゃあ～！

家元が、巨大な筆をバケツに突っ込み、『袖』という文字を書きあげる。
書き終えた後、暫く、感慨深げに、みんなで鑑賞している。

古神　あれ？　袖って、コロモ偏ですよね。
家元　どうした。
古神　これ、シメス偏ですよ。
家元　え？

確かに、『袖』のコロモ偏がシメス偏になっている。
みるみる家元の血相が変わっていく。

古神　あ、いや、見間違いかな？　だな。

会計　あ、あ、ありますよ、ここにほら、（コロモ偏に見えるべき）点が。
新人　いえ、ありません。
一同　え？
新人　これはシメス偏だ。
会計　コロモ偏です！　家元が間違えるわけがない。
新人　そう、間違えるわけがない！
会計　え？
新人　だからこそ、このシメス偏には何か意味があるんですよ。
古神　え？　あ、そうか、そうだね。意味があるんだ。
家元　今頃気がついて、馬鹿ものたちが。
古神　で、どんな意味が？
家元　……自ら、考えよ！

家元、奥へ去る。
新人は、その字を見ながら一生懸命考えている。マドロミもその字を見つめている。
家元夫人、古神、会計三人、遠くでこそこそと。

家元夫人　こんな間違いをするようじゃ……。
古神　あなたがそんなことを言ってどうするんです？
家元夫人　まだ信じるの？　信じうるの？　るるるの？　られるるの？
古神　私はどこまでもついていきます。
家元夫人　今日までうまくやってきた方よ、私はそう思っているのよ。
古神　お前は？
会計　私にそういうことを聞かないで！

マドロミ　あたし、思うんですけど、これは『袖』と書くつもりが『神』という字に変わってしまったのではないかしら。

一同　え？

マドロミ　『神』ならばシメス偏です。そういうことじゃないですか？

家元夫人　私はそうだと思っていたわ、ねえ。

会計　もちろんです。

古神　そうか、神だ。神という文字だ。だから、あれほどギリシアの神々とおっしゃっていたんだ。

奥から、家元が再び現れる。

家元　……わかってくれたかな、そういうことだ。

古神　あれ？　でも『神』という字の割には、ここが（つくりの『由』の下の部分）突き出ていないようにも見えます。

家元　どこがだい。どこが？　どこ？　どこ？

そう言いながら、『由』の下のところをさりげなく伸ばして『申』に変える。

家元　お前本当にわしから大家（たいか）の免状をもらった男か？

古神　あ、いえ、突き出ていました。

家元　遅いよ。こんなに明らかに、どう見ても『神』という文字を書いて見せたのに、お前には『袖』にしか見えなかったのか。

古神　いえ、神に見えます。

家元　何が？

古神　いえ、この文字がです。

家元　文字じゃない。わしは今何に見える。

古神　え？

マドロミ　神に見えます。

新人　そうだ、神に見える。
家元夫人・会計　そうね、そうよ、そうそう。
古神　確かに、ゼウスっぽいものがゼウスになりました。
家元　（夫人に）覚えているだろう、おまえ、旅先のオリュンポスの山の頂でのこと……。
家元夫人　え？　ええ、ええ、ええ。ええ？　ええ。もちろんですとも。
家元　オリュンポスの頂で何があったんだっけ？
家元夫人　あれはすごいことでした。
家元　あれって？
家元夫人　だから、もうもう、私の口から言えるようなことでは……。
マドロミ　だったら、私の口から言ってもいいですか？
家元夫人　え？
マドロミ　オリュンポスの頂に、家元がお立ちになった時、雷（いかずち）が轟き叢雲（むらくも）が覆い、ゼウスが舞い下りてきたんです。そして言ったのでしょう？
『これからは、お前が地上のゼウスになるだろう』と。
家元　そう！　わしがゼウスになったあの日。『わし』と『和紙』が一体化した。そして、この『紙』に『神』が舞い降りてきたんだ。

家元が、サラサラっと書く。『月桂樹』と書く。
すると『時間』の裏側から、ダプネーが駆け込んでくる。追ってアポローン現れる。
ダプネー、逃げる。アポローン、追う。
家元ら『時間』の裏側へ。

アポローン　ちょっと待てや～。
ダプネー　待てねえや～。
アポローン　そんな矢を飛ばしながら、アポローンはダプネーを追いつづけたことになっている。この古の森（いにしえ）に流れる時の中を。
ダプネー　なんで、そんなにしつこく追ってくるの？

アポローン　君がいとしいから。ほら、この古の時を刻む長い針、あれが僕アポローン。短い針、それが君ダプネー。でもいつか深夜の十二時に、二人は……重なり……合う。

ダプネー　うざい歌謡曲みたいなことを言わないで。

アポローン　でも本当さ。あの長い針は、僕の胸に放たれたキューピッドの矢。『君をいとしや』っていう矢だ。

ダプネー　じゃあ、短い方は、私の胸にキューピッドが放った『あんたがうとましや』っていう矢よ。

アポローン　そうか、短針が長針から逃げているのは、うとましいからなのか。馬鹿だな、短針の奴。時計の針なんて、逃げれば逃げただけ時が刻まれ、年を取っていくだけなのに。でも君は逃げれば逃げるほど美しくなるだけだ。

ダプネー　何とかならないかな、この口八丁男。

アポローン　ははは、君こそ誰から逃げているか分かっていないんだ。僕の正体は……。

ダプネー　神様でしょ、ギリシア神話の。

アポローン　デルポイの里の主、この世の予言はすべて、このアポローンの……え？　知ってたの？　僕が神様だって。

ダプネー　最初から。

アポローン　それで僕から逃げるって、どういうこと？　神様が命がけで愛してるんだよ。

ダプネー　神様に命懸けで愛しているって言われてもだめだな。

アポローン　どうして？

ダプネー　だってあんたたち神様はさ、所詮、死なないのよ。不死なのよ。だから命懸けで愛しているって言われても、本当は命かかってねえから。

アポローン　昔付き合っていたマルペーッサって娘にも同じことを言われた。

ダプネー　っていうかさ、今、この状況で、元カノの話を遠い目でしているあんたの神経が分からない。

アポローン　彼女、僕と人間の彼氏と……。

ダプネー　無視かよ。

アポローン　彼女、神様か、人間かどっちを彼氏として選ぶか、ずっと悩んでいた。

ダプネー　わたしは悩まないよ。永遠に若い神様よりも、一緒に年を取ってくれる人間との恋がいいに決まってる。こっちは婆あになって死にかけているのに、向うはいつまでも松潤の顔をしてたらいやだよ。

アポローン　それって、神様批判？

ダプネー　え？

アポローン　だったらなんでここにいるのさ。ギリシア神話の中に。

ダプネー　ダプネーという名をもらってからというもの、私は永遠に逃げる役を負わされている。これは永遠の拷問。

アポローン　僕、君は、ものすごくゼウス信仰があついって思っていたんだけど、そうでもないの？

ダプネー　（あたりをきょろきょろ見て）ゼウス様は、いつでも見ているよね。

アポローン　たぶんね。

ダプネー　だったら、ゼウス様は、絶対。寧ろ声高にこう叫びたい。ゼウス様。この逃げ続ける暮らしを終わりにするために、この川べりで私をこの世から消し去り、どうか別のモノに変えてください。

アポローン　本当に君は何かに姿を変えたいのかい？

ダプネー　ええ、ギブミーチェインジ。

柱時計の音、ボーン、ボーン、ボーン。

その間に、後ろからキューピッドたちが回りこんでくる。ダプネーとアポローン、時計の後ろへ。

押し出されるように、時計の反対側から、書道教室の人々現れて修行中の書道教室の風景をつくる。

そこで黙々と人々は、何かの『書』を写し書いている。

新人　（時計を見て、自らその手を止めて）お、こんな時間。やめい！　シャキョウ終了です。

全員、その手を止める。

家元　大家（たいか）、古神筆の助。何を写経した？

古神　何をって、もちろん、仏説摩訶般若波羅蜜多、観自在菩薩行深……。

家元夫人　えー、ふつうに写経をしてどうするの？

新人　家元の話を聞いてなかったんですか？

古神　ああ、もちろん聞いてましぇしましぇんでした……。

家元　なんて話した？

古神　だからあれでしょ、あの、あれを写してあれして書けって。

家元　お前、本当に物忘れか、それとも悪意か。

古神　（小声で）何をあれしろっておっしゃったんだ？

マドロミ　般若心経の代わりに、ギリシア神話を写経するの。すなわちギリ写経よ。

古神　ああそうだ、そう言われました。

マドロミ　たった今、わたしは、『ダプネーとアポローン』の話を写経したばかり。

家元　何のために、そんなことをするんだ？

マドロミ　ここにいる誰もが病んでいるからです。

家元　今や世界が病んでいる。世界が私に救いを求めている。ダプネーのように。今の姿を変えてくれ、と。だから、ギリ写経で世界を救う。

古神　字を書くくらいで、どうやって？

家元　どうやって！？　どうやって！？　どうやって？　小金田文鎮（こがねだ ぶんちん）！

会計　ええ！？……どうやって！？

家元夫人　私に振らないで。

マドロミ　ここに書かれているのは、人間が変わっていく物語だからです。人間は変われるんです。月桂樹にでも、蜥蜴（とかげ）にでも、岩にでも、海にでも、蛇にでも、星にでも。

古神　でも、神話は所詮作り話だろう？

マドロミ　いいえ、ギリシア神話に書かれていることはすべてが本当に起こったことなの。

新人　じゃあ、今写経した『ダプネーとアポローン』も実際にどこかで起こったドキュメンタリーだとでも言いたいの？

再び、ダプネーとアポローンが、柱時計の裏から出てくる。

ダプネー　ゼウス様。この逃げ続ける暮らしを終わりにするために、この川べりで私を消し去り、どうか別のモノに変えてください。
アポローン　本当に君は何かに姿を変えたいのかい？
ダプネー　ギブミーチェインジ。

が、書道教室はそのまま。ギリシア神話の世界と共存する。

家元　実際に起こったことだと思うわけだね？
マドロミ　はい。
家元　昔々の大昔にな。
マドロミ　そんなに昔ではありません！
新人　そうだね、現代のストーカーの話にも見えるよね。
マドロミ　ストーカーとは違います！
新人　え？
マドロミ　アポローンは、ただダプネーを追いかけまわしたわけではないんです。
古神　何を向きになるかな。
マドロミ　だってたぶん、このアポローンこそ私の弟なんです。
会計　おかしいわ、この女。
家元　まだ病んでいるんだね、幻に。
マドロミ　え？　はい。聞こえてしまうんです。
家元　だったらもう少し続けなさい。ギリ写経を。幻から解き放たれるまで。

マドロミ、新たに写経を始めると、ダプネーとアポローンが再び息を吹き返す。
ただし、アポローンのセリフはマドロミが喋る。

マドロミ（アポローン）　本当に君は、何かに姿を変えたいのかい？
ダプネー　ええ、ギブミーチェインジ。
マドロミ（アポローン）　分かった。……教えてあげるよ。このままでは君は、やがて月桂樹になる。
ダプネー　はあ〜！？
マドロミ（アポローン）　君は最後は、僕から逃げ疲れる。そして、大河のそばで、まず激しいしびれが君の両足を襲ってくる。次に、体中の皮が、樹木の厚い皮のようになる。そして気がついたら、河にたたずむ一本の木。ダプネーの樹、月桂樹に変わってしまう。

新人、マドロミの写経を横でのぞき見て、

新人　じゃあ、君のドキュメンタリーの中では、ダプネーは本当に体中が痺れてしまった女ってことになるよね。
古神　笑えるなあ。
マドロミ（アポローン）　ほんと、こんなギリシア神話みたいなところにいちゃ体が持たないって。
ダプネー　だからって、今更どうすればいい？
アポローン（マドロミ）　僕が君を救う。ここから。そのために君を追ってきた。

家元と家元夫人が、マドロミのギリ写経を覗き込んでいる。

家元夫人　そのアポローンのコトバはちょっと聞き捨てならないわね。
家元　わしから、そのアポローンが逃げ出したいとでも言っているようだ。（マドロミに）君のギリ写経では。
アポローン　というか、本当は……（周りを気にして）僕は……ゼウスから君を救いたいんだ。君、ゼウス様のことをもはやあまり信じていないんだろう？
ダプネー　（あたりをk見て）ゼウス様は、いつでも見ているよね。
アポローン（マドロミ）　たぶんね。
ダプネー　だったら、ゼウス様は絶対。

マドロミ（アポローン）　やっぱり、逃げられないのか、その君の逃げ足をもってしても。
ダプネー（マドロミ）　無理だよ。……というかゼウス様のおそばにいたいです。
家元　そうか、それがいいぞ。

家元、満足げに、奥へ去る。
ここからは、マドロミが写経をしている。
アポローンは自分の言葉で喋る。

アポローン　でも、ここだけの話、君が崇拝するゼウスはさ、森のニンフに強姦まがいのことをして、ニンフを妊婦にした挙句、熊にかえちゃう奴だからね。

アポローンが、ダプネーに足錠をかける。

ダプネー　え？

その鎖をまた自分の足につなぐ。

ダプネー　何してんの？
アポローン　こうすれば、ダプネーとアポローン、二人は離れられない。
ダプネー　これって、どっちに得なの？
アポローン　え？
ダプネー　確かにあたしは、あなたから逃げられない。でも、あなただってこのギリシア神話の世界から逃げにくいでしょう？
アポローン　そうか……。
ダプネー　すぐにつかまっちゃうよ。だって、あたしは決めたの、あなたからは逃げる。でもここからは逃げない。

アポローン　二人で逃げよう。

アポローン、試しに二人で逃げようとするが、嫌がるダプネーのお陰で、ずるずるになり逃げられない。

ダプネー　むしろ、どちらにも不利なことになっちゃってるよ。

そこへ、アルゴスが現れて、アポローンに足錠をかける。

アポローン　え？

その鎖をまたアルゴス自身の足につなぐ。

アポローン　何やってんだよ、お前。

アルゴス　俺と逃げよう。

アポローン　え？

アルゴス　お前を救いに来た。このギリシア神話という世界からアポローン、お前を助けに来た。

アポローン　でもアルゴス、お前の職業は番人だろう？

アルゴス　ああ。

アポローン　だったら、お前に救われたって、またその百個の目玉で見張られるだけじゃないか。

アルゴス　うまいこと言うな、さすが何にでも秀でた男だ。

アポローン　いやいや、そうじゃなくて。

アルゴス　いいんだよ。

アポローン　この人はどうする。俺は、ダプネーを救いたくてここにいるんだ。渋々、このギリシア神話の世界に。

アルゴス　みんなそうさ。ここでは、誰かが誰かを救おうと思い、渋々ここで生きている。ここに住みつく者はみな共犯者だ。父殺し母殺し友人殺し女殺し。ギリシア神話は犯罪者の巣窟だ。誰一人として罪を犯していない者はいない。そこから、アポローン、君を救いたいんだ。

アポローン　本気か？

アルゴス　本気だ、俺の目を見ろ百個。

アポローン　どの目を見ればいい？

ダプネー　ちょっと、友情だかホモだか知らないけど、向うでやってくれる？　うっとうしいわ。

アルゴス　無視しろ。

ダプネー　どうすんのよ、こんなぐずぐずの姿をゼウス様に見つかったら。

アポローン　鍵を返せよ。

アルゴス　いやだ。

写経をしていた家元夫人、古神、会計、その他の生徒。一斉に立ち上がり、神話の中の人物に変わっている。
家元夫人はヘーラー。
古神はクロノス。
会計はヘルメス。
生徒たちは、たくさんの地獄の犬たちとなる。（ただ『犬』という半紙をその手に持って現れる）
そして、アルゴスやアポローンにかみつく犬たち。二人、鎖に繋（つな）がれたまま、部屋の中へ押し込められそうになる。
その中でも、マドロミはただ一人黙々と、ギリ写経を続けている。

クロノス　（『疑心』と書かれた半紙を持っている）すんでのところで見つかってよかったです、妬み深いヘーラー。

ヘーラー　（『嫉妬』と書かれた半紙を持っている）そうね、疑り深いクロノス。

ヘルメス　（『要領』と書かれた半紙を持っている）しかも逃げだそうとしたのは、このアポローンですよ。

ヘーラー　そうね、狡賢いけど憎めないヘルメス。

クロノス　このアポローンがいなくなるのはギリシア神話界にとっては、かなりの打撃です。兎に角『青春とエーゲ海の光』担当ですから。（そう書かれた半紙を見せる）

ヘーラー　ゼウス様には黙っているのよ！

クロノス　暫く地下へと続く冥界に閉じ込めておけば、心も変わるでしょう。

ヘルメス　（犬に）犬、犬、犬。さ、早く閉じ込めろ。

アルゴス　この犬たちは、ギリシア神話界でも由緒ある犬だ！

ヘーラー　どんな由緒があるっていうのさ？

アルゴス　飼い主をかみ殺す犬だ。

ヘーラー　え！？（手に持っている鎖を慌てて、クロノスに渡して）わたしは飼ってないわ。

クロノス　（慌てて、ヘルメスに渡しながら）私の犬でもありません。

ヘルメス　犬など飼ったことがありません。

犬がキョロキョロする。

アルゴス　犬ども、ここは主人のなき世界だ、誰の言うことも聞くな！

ヘルメス　えいっ。犬ども、ご褒美に、皇室御用達のコロンバンのビスケットだよ！

と、黄金の扉が地面に置かれる。そして、それを開くと、そこには地下への穴があいている。

ビスケットを投げ入れる。

アルゴスとアポローンが、そのまま犬たちに追われるように中へ入ることになる。すべてが入ると、黄金の扉が閉じられ、そして、立てられる。

すると、地下へ続く穴は消えて、地面はもうただの床になっている。

ヘーラー　（ダプネーに）お前も入りな。

ダプネー　（『月桂樹』と書かれた半紙を見せて）私よ、ダプネーよ。ゼウス様に目をかけられているダプネーよ。

ヘーラー　そんな話、聞いたことないね、ゼウス様に目をかけられているダプネー。
ダプネー　言ってるじゃない。
ヘーラー　あ、今の？
ダプネー　私、ゼウス様にこっそり言われたの。これからは、隣にお座りって。
ヘーラー　は！？　い～い？　ゼウスの隣に座るのは妻。私以外はありえないの。
クロノス　ま、どうせこの女もすぐに目をかけられなくなる。
ダプネー　そんなはずないわ。
クロノス　今はもう、次の女に首ったけだから。
ダプネー・ヘーラー　わたし以外あり得ない！
ヘルメス　いや、ここら辺がちりちりっとした、気持ちよさそうな『次の女』よ。

真夜中の時計、裏に入っていく神々。
『嫉妬』『要領』『疑心』『月桂樹』『次の女』などと書かれた半紙が残っている。
一人、写経し続けているマドロミ。

家元　わかるかな、筆の震えが。
マドロミ　この紙に触れる筆先は、まるで神に触れる指先のようです。
家元　その筆の震えが痺れに変わる時、君の人生も本当に変わるんだ。まだ写経を続けているのかい、一人で。
マドロミ　ええ。
家元　君のギリ写経『ダプネーとアポローン』の中では、ゼウスも『次の女』も名前ばかりで姿を見せないね。
マドロミ　（姿という文字を書いて見せる）でも、『姿』の中に『次の女』はいます。
家元　その姿を現さない次の女は、何をゼウスに求めているんだ。
マドロミ　（救いという文字を書いて見せる）救いではないですか？
家元　救い？

マドロミ　だって、『救』いの中に『求』めがあるのでしょう。
家元　（魂という文字を書いて見せる）けれどその救いを求める『魂』の中には『鬼』が住んでいる。
マドロミ　じゃあ、ゼウスの次の女の姿は『鬼』なんですか？
家元　（胆という文字を書いて見せる）その鬼が住みついた魂に『胆』がつくと、魂胆が生まれるからね。
マドロミ　ゼウスの次の女は、魂胆を持っているということですか？
家元　魂胆なんか持ってここに入ってくる奴は、つまり……おまえは、その魂胆を捨てない限りここから出られないよ。
マドロミ　どういうことです？
家元　魂胆の『胆』の中には、月日がある。その月日をかけて、いったい何をしようという魂胆かな？
マドロミ　どんな魂胆に見えます？
家元　ここを探っているだろう？……さっさと魂胆を捨てろ！
マドロミ　魂胆を捨てると、どうなるんですか？
家元　私の隣にだって座れる。
マドロミ　あなたの隣？
家元　隣にいれば、私の魂からたくさんのコトバが聞ける。
マドロミ　あなたのコトバが？
家元　誰にも聞こえないわしのコトバが。
マドロミ　じゃあ捨てます……魂胆を。
家元　……だったらお前に名前をあげよう。

書道教室における命名式にかわる。
書道教室一同がそこに集められている。
厳かに、何かを盃にもる。
キューピッドたちが、お小姓のように家元の周りにいる。

家元　この仮初(かりそ)めの世で仮初めの親たちからもらった糞みたいな名前を、お前たちは大事にしてきた。だが今日から、ギリ書道の道では、わしがお前たちのゴッドファーザーとなる。

家元夫人　本日は、始祖ゼウス様に仕える聖なる鳩たちが、人語を発し、ゼウス様のヘルロイ、すなわち、神託、神のお告げをすることで、めいめいにゼウス様直筆の名前をとらせます。私も含めて。

家元　ではまず、お前の名前から、ここへ。

家元夫人　はい。

家元夫人、家元の前へ出る。

家元　おまえじゃない。順番が違う。

家元夫人　え？

家元　（家元夫人に）お前は次の次の女だ、（マドロミに）前へ。

マドロミ　はい。

家元　名前を取らせよう。

マドロミ　ありがとうございます。

家元、筆を持つ。

家元　降りてこい。私の筆に。遠くウーラノスとガイアがまぐわった日の震え。降りて来るがいい、その震え。

鳩たち　震えが痺れに変わります。

家元　お前たちは私の鳩。そいや〜！

白い鳩に化けた若い女たちが、痙攣(けいれん)を始める。そして、その紙を人々に見せる。するとそこに名前が書かれている。

家元　アプロディーテー。お前のこの地における名前だ。これを。
マドロミ　なんですか、ゼウス様。
家元　ネクタル。神々が飲む飲料だ。お飲み。
マドロミ　（一息で飲む）
家元　そしてこれからは、アンブロシアを食料としなさい。人間の食べる物はやめなさい。
マドロミ　すべてですか？
家元　特に焼き肉はやめなさい。本当に絶対にいけません。そのことで、イコール、つまり神の血がおまえの体内を流れることになります。
マドロミ　では、心血を注いだ文字をここに。
家元　うん、書すがいい。『泡から生まれた泡娘』と書きなさい。

そこで、字を書きはじめる。
古神筆の助、前に進み出ようとするが……。

家元　次の次の女、おまえもその名を変えよう。
家元夫人　次の次でありがとうございます。

家元、サラサラっと書く。

家元　ヘーラー。
家元夫人　……え？　それだけ。だって、あの女には、アプロディーテーなんて長ったらしいのつけて。私はただヘーラーって、もっとヘーラーズグチタタイテーナティナターナーみたいな、手の込んだ、名前……。
家元　ヘーラー。
家元夫人　何と書きます？
家元　『後は野となれ山となれそして野山の糞となれ』……そう書きなさい。

そこで、字を書きはじめる家元夫人。
古神筆の助、前に進み出ようとするが……。

家元　次の次の次、新人、前へ。
新人　はい。

家元、サラサラっと書く。

家元　お前の名はプロメーテウス。
新人　ありがとうございます。
家元　君は、やがて私と共に人類を助けることになる。
新人　何と書きますか？
家元　『火事場の馬鹿力』。
新人　ありがとうございます。

字を書きはじめる新人。
古神筆の助、前に出てくる。

家元　なんだ？　どうした？
古神　いえ、もうそろそろかなと……。
家元　お前にはもう名前やったろう？
古神　いえまだ。
家元　名無しでいいよ。

古神　え？　でも、ギリ書道の大家（たいか）が名無しというわけにも。
家元　大家（たいか）はプロメーテウスに変わった。
古神　え？　いつですか？　いつそんなことが？
家元　今。目の前で。物忘れか？
古神　いえ見てました。
家元　早業だったからかな。兎に角お前は名無し。がんばれ。
古神　はい、でもあの、あれがないと、あのあれ……。
家元　次の次の次の次。

誰も前へ出てこない。

家元　会計係の小金田文鎮……お前には、ヘルメスという名前を用意した。
家元夫人　小金田！　小金田！　文鎮！
古神　いません。
家元　いない？　どういうことだ？
家元夫人　金庫がないわ。
古神　逃げた……のか？

人々、方々へ散って探し始める。
誰もいなくなる。
そこへ、金庫を手に駆け込んでくる、会計、小金田文鎮。片手で電話。

会計　あ、もしもし、今からそちらへ行きます。事情を説明したりできるようなそんな暇も心のゆとりもありま……。

外への扉に手をかけた時、古神が現れる。

古神　なんで、お前一人で逃げるんだよ。

会計　ここでやっていることはおかしいです。

古神　俺だってもう何が起こっているのか、よくわかんない。

会計　元々は、ただの町の書道教室じゃないですか。

古神　そうだ。俺は、ここを貸していた、ただの大家（おおや）だ。大家（たいか）なんかじゃなかった。

会計　それが、あんなことが起こって……。

古神　怖いのか。

会計　ああ。

古神　だったらなんで、金庫まで持って逃げる、怖かったら手ぶらだろう。怖いのに金庫ってどうなんだ？

会計　でも今までここでやって来たことが、何でもなくなるっていうのも、そりゃどうかなって。

古神　じゃあ俺の分くらいは少しおいていけよ。

家元と家元夫人が現れたのに気がついて、

古神　あ、いました！　見つけました！　ここにいます！

会計　え？　なんだよ、おまえ。

古神　ヘルメスです。ヘルメスがここに。

会計　何？　何？　ヘルメスって。

古神　せっかくヘルメスという名前を頂戴できるところだったのに、どうしたんだ？　どこへ行くんだ。

家元　どこへ行きたい？

会計　いえ、あの……買い物です。

家元夫人　五百『私』も持って買い物？　それも、これ偽（にせ）『私』紙幣じゃない？　つまり、外で使える本物の金じゃない！？

家元　四階に上がろうかな。
会計　え？
家元　おい、名無し。
古神　はい、エレベーターですね。

四人、エレベーターにのりこむマイム。
「四階です」と自ら言って、四人エレベーターから出てくるマイム。そこは四階。

家元　おい、名無し！
古神　はい、墨と筆です。
家元　名無しになったら、とたんに気がきくようになったな。
古神　名無しになってみたら、何でも書ける。何でも言える。そんな2ちゃんねる気分になってきました。
家元　よし、では今から、わし自らが、（会計に）お前を大家（たいか）にするための特練をしてやろう。
会計　大家（たいか）なら、そこにいらっしゃるじゃないですか？
古神　僕はもう名無しだから。
家元　お前が金庫を持って逃げ出した褒美として、お前を大家（たいか）にしてやろうと思うんだ。
会計　そんなおかしいですよ。
家元　おかしいか、名無し。
古神　いえ、おかしくありません。
家元　どう思う？　わが愛しのヘーラー。
家元夫人　いいわねえ……ありがとうを言った方がいいんじゃない？
会計　あ、ありがとう。
家元夫人　ございます。
会計　ございます。

家元　ギリ書道の大家（たいか）だから（会計に）お前ギリ写経をやれ。

会計　どんなお話を書き写すのですか？

家元　『パエトーン』の話がいいな。お前、ヘルメスはやめだ。パエトーンになれ。

会計　はい。お願いします。

家元　パエトーンは、真っ黒な顔をした少年でした。或る日友達に、それは自分が太陽の子供だから黒いんだよ、と言ったのです。『太陽の子？　お前が？　嘘ついてんじゃねえよ～』仲間に大笑いされたパエトーンは、父さんに会いに行きました。父さんの太陽は、『長い間そんな辛い思いをさせて悪かったなあ、代わりに何でもやる』『え？　じゃあ、あの日輪の馬車を下さい』さっそく乗り込んだパエトーンは、暁の女神が開いた東の門を意気揚々と駆けて出た。途端、すごいスピードで馬車は走る。少年にはそれを御（ぎょ）することができない。手綱を落とし、馬車は火焔（かえん）の炎に包まれた。なおも空を駆けめぐり、この世を真っ黒焦げにした挙句、あわれパエトーンは、流れ星のようにヒューッと……書き写したか？

会計　書き写しました。

家元　どう思った。

会計　悲しい話です。ありがとうございます。

家元　私、パエトーンは、こうした一連の不祥事すべての責任を……。

会計　は？

家元夫人　まだ写経は終わっていませんよ。

会計　あ、はい。……私パエトーンはこうした一連の不祥事すべての……。

家元　責任を負うものであります。

会計　責任を負うものであります。

家元　よって私はここに、自分の死を以て償おうと思うものであります。

会計　よって私はここに、自分の……。

家元　なんで止めた？　自分の死を以て……。

会計　これ、遺書ですか？　遺書なんですか？

家元　何言ってるんだ、今、私たちは何をやっているんだ、名無し。

古神　ええと、あれですね、パエトーンの写経。大家になるための特練です。

家元　名無しも昔はただの大家だったよな。

古神　はい。ここの大家でした。

家元　大家から大家になる時、こうやって書いたよな。

古神　ええ、書きました。

会計　ホントかよ、遺書を書いたのかよ、見せてみろよ、聞いてないぞ。

古神　書いたよ、書いたんだよ。誰もが大家になる時は書かなければいけないんだ。大家になるということは、それほどに命懸けなんだ。

家元　ただ、もう我々はみな神様になったからね、命懸けと言っても、その命は軽いけどね。どうせ不死だから。

会計　見せろよ、ほんとにお前も書いたのなら見せてみろよ。

家元夫人　この人は今、名無しですよ。もうそんな遺書は必要ないんです。

会計　すいませんでした。ほんとに金庫を持って逃げ出そうなんて絶対に考えませんから。だからお願いします、許してください。

家元　何を言ってるんだ。これは大家になるための最終特練だぞ、なんでこいつ泣いてんだ？　へーラー。

家元夫人　え？……うれし泣き？　でしょう？　ね、そうよね。

会計　はい、そうです。

家元夫人　よかった。

会計　じゃあホントにこれはただの特練で遺書ではないんですね。

家元　遺書だよ。

会計　（大声で泣く）

家元　パエトーンの死はむしろこう問いかけてはいないか？　幸福だけが、この世のただ一つの価値なのか？　健康で長く生きることだけがただ一つの価値なのか？……と。

しみじみと納得する古神、家元夫人。

家元　だからね、遺書を書いておきなさい、パエトーン。君に今死んでもらおうなどとさらさら思っているわけではない。

会計　……本当ですか。
家元夫人　本当よ。
会計　そうですよね。
家元夫人　そうよ。
家元　だから、書きなさい。自分の筆で、筆跡で、力強く、『自分の死を以て償おうと思うものであります』。
会計　『自分の死を以て償おうと思うものであります』。
家元　よろしい、後は名前、本名の小金田文鎮で。
会計　（泣きながら名前を書く）

家元、できあがった遺書を取り上げる。

家元　窓から放っていいぞ、名無し。
古神　え？
家元　放れ！
古神　遺書をですか？
家元　やっぱり名無しだな、お前は。愛しのヘーラー、お前も手伝ってやれ。
家元夫人　はい。
家元　パエトーンが天空を駆けて落ちて行くんだ、ヒュー……。

家元夫人と、古神で、会計の両側を抱えて、窓まで連れて行く。

会計　やめて、もうホントに絶対逃げませんから。
家元　（扉を開けて）おい、アプロディーテー、プロメーテウス、大至急ここに来てくれ！

窓から会計を投げ捨てた瞬間。
マドロミと新人が扉から入ってくる。
そして、まさにその瞬間を見てしまう。
会計の指だけがまだ、窓の縁に必死にしがみついて残っている。その指には誰も気がつかない。

マドロミ・新人　え？
家元　どうした？
新人　今、何をしたんですか？
家元　私が聞きたい。プロメーテウス、アプロディーテー。新しく神の座に座った者たち、今何を見た？
新人　何かを捨てましたよね。
家元　何を捨てた？
新人　人間。
マドロミ　ゴミ。
新人　ゴミのわけないでしょう。大きなものでした。というか、人間でした。今、この人たちは窓から人間を捨てたんですよ！
家元　お前たちが今コトバにしたもの、それを捨てた。人間を捨てたと言うのならば人間。ゴミを捨てたと言うのならばゴミだ。
新人　どう見ても人間でしょう。ね、そうでしたよね。
マドロミ　いえ、ゴミを捨てました。
家元　あれ渡しなさい。名無し。
古神　はい。

古神、新人に電話をさしだす。

古神　もしも人間が窓から落っことされたのだとしたら、それは大変なことでしょう。電話しなさい。今すぐ。警察に。
新人　え？

家元　名無しになってからはお前も、だいぶわかってきたよな。

古神　（自慢げに）電話しなさい。

新人　あ、でも。

古神　だって、君見たんでしょう。見てしまったんでしょう？　だったら、電話をしなくちゃ。

新人　あ、はい。

新人、電話をもらう。そして、ボタンを押す。

家元の顔を見て……電話を切る。

家元　どうしたんだ？

新人　いえ。

家元　電話をしないのか？　窓から人間が放り投げられたのに。それとも、人間ではなかったのか？

新人　人間でした。

家元夫人　でも電話はしないのね。

新人　はい。

家元、窓を開ける、と窓にぶら下がっている会計の悲鳴が聞こえてくる。

家元　あ、君の言うとおり、人間だったよ。

マドロミ、窓のところへ真っ先に走り寄る。

会計のしがみついている手を取る。その途端に、その背後から、無数の『救い』を求める手が伸びてくる。それらは、ギリシア神話の世界の変身していくものたちの姿。声は聞こえないが、叫んでいる。

新人、窓に行って、会計の手をとって引っ張り上げる。

ギリシア神話の世界の幻は消える。
会計が泣きながら、抱きついてくる。

会計　ありがとうございます。ありがとうございます。
家元　わかるか？　これでお前も大家（たいか）になれた。
会計　はい？
家元　お前の自筆の命をかけた素晴らしいギリ写経を受け取ったぞ。
会計　本当に、本当に今のは修行だったんですね。
家元　（遺書を見せて）お前が書いたこの文字には、命がかかっている。ただし神様の命だから、これからも軽いけれどな。（懐にしまいこむ）
会計　胆に銘じます。
家元夫人　これで、プロメーテウス。お前も我々のお仲間。と言うか、共犯者ね。
新人　共犯者？
家元夫人　だって、人間が放られるのを見たのに、何もしなかったわ。
新人　はい。
家元　そしてアプロディーテー、お前は共犯者かな？
マドロミ　私は、その窓から捨てられるゴミしか見ていません。
家元　どんなゴミだった？
マドロミ　ここで書き損じたコトバを、カミガミと一緒にくしゃくしゃに丸めて、世界にあふれかえったゴミです。あんなゴミは捨てられて当然です。……あたし、本当はドキドキしていました。でも、何も起こらなかったんですよね。窓から放られた、それさえ幻。ドキドキだけが残ったんですね。
家元　そうだ。それが、わたしの隣に座るということだ。
一同　え！？　家元の隣？
家元夫人　そこは、妻の私の座。
新人　いえ、大家（たいか）の私がこれから。

会計　命懸けの私が。

古神　なんだかわかりませんが、名無しの私が。

家元　いや、次の女、次女に座ってもらう。

マドロミ、懐から、くしゃくしゃになった半紙を出す。

そして、家元の隣に座る。

マドロミ　……そうね、そうして、この男の隣に座ったのね、おまえも。ここまで来たよ。やっと。月日をかけてここまで来たよ。私の月日をかけた魂胆が、お前の俤を追って。……もうじき、お前の腕をつかんであげる。だから、絶対に。絶対にだよ、お前の白い指もその窓に、しがみついておくんだよ、今助けてあげるからね。

柱時計の裏側から、アルゴス、アポローンの二人が鎖に繋(つな)がれたまま走り込んでくる。

犬が追いかけてくる。

二人隠れる。犬が去ると、こっそりと二人顔を出す。

アルゴス　俺、お前の姉さんに会ったぞ。

アポローン　姉さんと！？　そうか、届いたんだな。

アルゴス　何を送ったんだ？

アポローン　僕が書いた文字。三枚の半紙に一文字ずつ書いて……どこで会った？

アルゴス　まどろむ窓辺で。

アポローン　元気そうだったかい？

アルゴス　そこでお前の姉さんと約束をした。

アポローン　何を？

アルゴス　お前を届けるって。

アポローン　届ける？
アルゴス　俺たちが、やがて逃げた先のその末路で、お前の姉さんが待っている。我々のこの鎖の先で……。
アポローン　なんでそんなことが分かる？
アルゴス　ヘルメスをこの世に案内したカローンさながらさ。俺が案内をしてやる。行こう。俺たちのこの鎖がちぎれるまで逃げきるんだ。
アポローン　でもダプネーが何と言うか、なにせ最初に口説いたのは俺だし……。

ダプネーがいたはずの鎖の先を見せる。

アルゴス　わかっているだろう。もう彼女はここにはいない。
アポローン　いない？　いるじゃないか。ここに。
アルゴス　何言ってるんだ。
アポローン　姿を変えはしたけれど。
アルゴス　月桂樹に変わったっていうことかい？
アポローン　僕もそうなると思っていた。ところが、ダプネーの奴、ほら、ここで鎖になった。
アルゴス　え？
アポローン　僕と二度と離れられない鎖に変身してしまったんだ。
アルゴス　この鎖がダプネー？
アポローン　そうさ。
アルゴス　俺には、だんだんわかってきた。あのゼウスを名乗る男は、このギリシア神話に、ここで起こったすべての罪を、埋め込んでしまおうとしている。
アポローン　でもギリシア神話で起こった罪をギリシア神話に埋め込む。至極まっとうに聞こえる。
アルゴス　違う。ここだよ。
アポローン　ここ？
アルゴス　この町はずれの書道教室で始まった贖い難い罪さ。

アポローン　町はずれの書道教室？
アルゴス　そうだ。
アポローン　なんだそれ。
アルゴス　覚えてないのか？　アポローン……と呼ばれた男だ、お前は。
アポローン　……ごめん、何も覚えていない、アルゴス。
アルゴス　と呼ばれた男だ、俺は。
アポローン　え？
アルゴス　お前は、ここに忍び込んできた。
アポローン　忍び込んできた？　俺が？　なんのために？
アルゴス　こっちが知りたい。ただの好奇心だったのか？
アポローン　それじゃまるで俺は、えせジャーナリストか。
アルゴス　俺はそう呼んでいた。
アポローン　何だ、そう呼んでいたって。
アルゴス　えせジャーナリストって。でもお前は違うって。
アポローン　そりゃ違うさ。俺は……。
アルゴス　何だ。
アポローン　えせじゃない。本当のジャーナリストだ。えせって呼ぶな。
アルゴス　そうだ、いつもそう言っていた。

マドロミが、時計の裏から現れる。
オバちゃんが外に現れる。
アルゴス、アポローン、時計の裏に消える。
マドロミとオバちゃん、携帯電話で話をしている。

オバちゃん　えせジャーナリスト！？
マドロミ　はい。
オバちゃん　うちの息子がよく言ってた。あのえせジャーナリスト、あれがあなたの弟さん？
マドロミ　えせじゃないですけれど。
オバちゃん　でもえせでしょう、うちの息子が言っていたんだから。
マドロミ　弟は信じていました。筆一本で世界を変えることができる。それが、ジャーナリストの仕事だって。
オバちゃん　それで、その書道教室へ入り込んだのね。
マドロミ　ええ、ここに漂う胡散臭（うさんくさ）さを世に暴（あば）こうと。
オバちゃん　えせジャーナリストが。
マドロミ　えせではありませんが、それでここへもぐりこみ、そしてあなたの息子さんとも出会ったようです。私があなたとばったり出会ったように。
オバちゃん　なんにせよ、急に幻の霞が消えてきたわ。
マドロミ　ええ、希望と呼んでいいのか分かりませんけれども、私の弟の名前さながら。
オバちゃん　え？　弟さん、希望っておっしゃるの？
マドロミ　いえ、希望と書いてノゾミ。でも女みたいな名前でいやだって。
オバちゃん　うちの息子の名前も希望っていうんです。でもうちのは、そのままキボウって……ね、私が言ったとおりでしょう。あなたは私と同じ立場。
マドロミ　本当にそうかしら。
オバちゃん　そうよ。
マドロミ　あなたの息子さんはその手で書かされた文字で、財産を取られた。（くしゃくしゃになった『俤』と『儚さ』を手に）でも、私の弟は、この書いた文字で、なんだか命まで取られている気がする。
オバちゃん　なんでそんなこと思うの？
マドロミ　『俤』『儚さ』そして何も書かれていない三枚目の半紙……最後に何も書けなかったんです。遺書なんです。きっと。この文字……。
オバちゃん　弱気になっては駄目。そんなことを思って何になるの。

マドロミ　あ、ごめんなさい。
オバちゃん　あなたの弟さんは幻なんかではない。どこかにいますよ。
マドロミ　でも、どこかにいるのなら、なぜ姿を見せないのかしら。幻のままなのかしら。
オバちゃん　それは、私の息子だって同じことです。
マドロミ　でもあなたの息子さんとは時々お会いしていますよ。ここで。
オバちゃん　ありがとう。その知らせをこの前あなたから受け取った時、まるでまたあの子が生まれてきてくれたような喜びに浸りました。だからあなたも、希望を捨てるのはやめましょう。きっと、事情というものがあるのよ。だからもう少し頑張ってね。私も外からやれるだけのことをやります。
マドロミ　では、あなたはあなたのやり方で。
オバちゃん　え？　中から助けてくれるんじゃないの？
マドロミ　見えてきた弟の俤を追い続けます。（今まで写経していたものを見せる）
オバちゃん　何のこと？
マドロミ　『ダプネーとアポローン』。
オバちゃん　まさかあなたまでそこにかぶれてしまったの？
マドロミ　いいえ、これは弟がここに潜入して書こうとしていたドキュメンタリーの表題です。これを書き継いでいこうと思っているんです。
オバちゃん　それじゃ、あなたこそ、えせジャーナリストになっちゃうじゃない。
マドロミ　他に手がありますか？
オバちゃん　……私は、今日もこれからやるつもりよ。

オバちゃん、インターホンを外から鳴らす。

マドロミ　あれ、どこにいらっしゃるんですか？
オバちゃん　すぐ外。

古神、会計、新人が、現れる。
慌てて携帯電話を切るマドロミ。
オバちゃん、さらにインターホンを何度も鳴らす。

会計　プロメーテウス、また何かやってきたぞ。
新人　この静謐なるギリシアの神々の世界を乱そうという輩（やから）だ。
会計　だったらこのパエトーンが守ります。神様の命がけで。
古神　名無しにはインターホンの音が分かる。これは新聞勧誘の音ではない。お届けモノの音だ。ただちに開けるべし。はいただ今〜。（扉を開ける）
新人　しまった！　開けた！
会計　どっちやねん。

大きな筆を持って乱入してくるオバちゃん。
筆には墨。

オバちゃん　私が、ここを直してやる。この筆で間違っているところを全部ね。
新人　何してんだ、お前。
オバちゃん　ほら、ここもバツ、ここもバツ。
新人　こんな真夜中に、大きな声を出して、近所迷惑です。
オバちゃん　真夜中って、真昼間だよ。
会計　古代ギリシア時間では真夜中です。
オバちゃん　寝ぼけたことを言ってるんじゃないよ、お前たちの目を覚まさせてやる。
会計　どうやって？
オバちゃん　私の後ろから、現実の目が見ているよ。

書道教室を外から覗いている、大量のマスメディアのカメラやら脚立やらが見えてくる。
書道教室は、報道陣に囲まれているのである。

報道陣１　こちらが、『ギリ書道』本部前です。
報道陣２　ここが疑惑をもたれている書道教室です。
報道陣３　この中には、古代ギリシアの時間に棲んでいると信じて暮らしている若者たちがいます。
オバちゃん　こいつらをちやほやするんじゃない。
報道陣１　同時に、様々なトラブルの絶えない書道教室でもあります。
オバちゃん　何がギリシア時間だ。こいつらが暮らしている時間は、ただの幼い時間なんだ。
古神　幼いってなんだ、幼いって。大の大人に向って。
オバちゃん　昔、子供が遊ぶ空き地には必ず冷蔵庫が捨て置かれていた。その空き地の冷蔵庫の中に流れる時間のことさ。
新人　いつの時代だ？
会計　そんなことをしたら、今では不法投棄だ。
オバちゃん　だったら、不法投棄された時間さ。キッチンにあれば何でもない冷蔵庫が、ただ空き地に捨てられているばかりに、子供の目には、その中に何かがありそうに見える。
新人　何かって何だ。
オバちゃん　お前たちが今そこで見ているものさ。紛い物の書道教室が何に見えているんだい？　子供が、空き地の冷蔵庫の中へ入っていったきり出てこられない。どんな思いで、母親たちは探し続けていると思うの？　子供が消えた空地までは来ている。でも、まさか、その冷蔵庫の中に入っているとは思わないじゃないか。
古神　出たくなったら、子供は出てくる。
オバちゃん　ところが、あいにく冷蔵庫というのはね、中からは開かない。
会計　いつの冷蔵庫の話だい。
オバちゃん　今でもシャープの冷蔵庫の上の扉は中から開かないんだ。ひと昔前ならなおさらさ。

会計　なんでひと昔前の話をするんだ。

オバちゃん　ひと昔前の話だからさ。冷蔵庫の扉は中から開かない。子供はそのことを知らない。だから私たちが外から開けてあげようとしているの。お前たちはみんな、空地の冷蔵庫の中に入ったままのガキなんだ。わかったかい。

古神　まったくわからない。

オバちゃん　だったら教えてやる。その百個はあろうかという扉のどれかに、私の子供がいる。その扉を開けな。

マドロミ　何のことをおっしゃっているの？

オバちゃん　（大きなウインクをマドロミにしながら）ここには時間に埋もれた地下がある。私は確かな情報をうけとっています。

マドロミ　そんな夢みたいな話があるかしら。

オバちゃん　え？

マドロミ　誰が言ったの？　そんなこと。

オバちゃん　誰って……言っていいの？

マドロミ　いいですよ。

オバちゃん　いえ、言えません。その人が困りますから。

マドロミ　ほら、言えないんですよ、この女！

オバちゃん　だって言えないでしょう。

マドロミ　言えないってことは、この女、出まかせを言っているんです。

オバちゃん　言えるけど、言ったら終わりでしょう、そのくらいわかるでしょ。

マドロミ　そんなにおっしゃるのならこの書道教室の扉という扉を開けて差し上げましょう。それで出まかせって分かるから。

古神・会計・新人　え？

マドロミ　そしてお見せしましょう。われわれの変身の物語を。

会計　どうなんだ？

新人　どうだ？

古神　いや、それはどうだろう。家元に聞かずに勝手なことをやって大丈夫か。

会計　家元をお呼びしよう。

新人　今ちょうど、家元の魂は、クレーテー島の方へいってらっしゃる。

マドロミ　病んでいた私たちが、書か、書き、書く、書け、過去を書こう。ただ、自分の過去を書くだけで、ここで立派に変身を遂げています。しかも、命懸けで。その姿を見てもらいましょうよ。さ、開けて。自分で開けて出てくるのよ。

まず、扉のいくつかが、中からバンバンと音を立てる。やがて、その音が大きくなる。

アポローンとアルゴスが入って行った黄金の扉を除いて、全ての扉が開かれる。

僅かばかり奇妙な姿の人間が現れる。扉がまた閉まる。再び開けられる。僅かばかり奇妙な姿の人間が現れる。扉がまた閉まる。それが数回繰り返されて、そしていっきに、中から、ギリシア神話の変身譚の物語があふれ出てくる。

「希望！　希望！」と言いながら、探し回っているオバちゃん。

マドロミも、弟を探している。

ふと、現実に戻る。

マドロミ　あなたの希望は？

オバちゃん　見つかりません。……あなたのノゾミも？

マドロミ　かないません。

オバちゃん　でも、希望を捨ててはいけないわ。

マドロミ　そうね。開け放たれたパンドーラーの甕（かめ）の隅（すみ）にいて、ぐずぐずと最後まで出てこなかったのが、希望というものの正体だもの。希望だけが姿を見せなかったのではなくて、希望だけが残された。そう思いましょう。

幻想は消え、その変身譚の人物たちが、書道教室の修行中の生徒として、整然と座り、ギリ写経をしている。

そして、テレビカメラの前で話し始める家元。

家元　皆さんのおっしゃっている意味が私にはわかりません。私の魂は、さっきまで、クレーテー島へ行き、そこでミノタウロスのギリ写経をしていました。だから事情が飲み込めません。一体、何が起こったのです？　この神聖な場所に。

オバちゃん　分からなきゃ何度でも言ってあげるわよ。そこにいる私たちの子供を返しなさい。
家元　子供ならば返します。でも彼らは大人です。
オバちゃん　あたし達の子供よ。
家元　そう！　『あなたたちの子供』という名の大人です。（古神、新人、会計らを指して）この子たちは、大人でしょう。そして、大人は冷蔵庫に入らない。っていうか、入れない。

ギリシア神話の一節を、書きながら読む生徒一同。

家元　君の修行は今日どこまで行った？
古神　タルタロスをひとめぐりしてきました。
家元　地獄めぐりか。
古神　恐ろしいところでした。けれども毎日、朝起きるたびに好奇の目で世界を見ることができます。
新人　何も変わっていないのに、私には世界が新しく見えます。
会計　それはゼウス様がいつも、新しいまなざしをくださるからです。
古神　ああ、こうやって、たったひと文字をあれすることが、あれです。
会計　書を嗜（たしな）みながら、私たちの頭の中はすごいことになっているんです。
家元　わかりますか？　今彼らはギリシア神話、いやギリシア実話の中をさまよい、そして、変身を遂げているんです。
新人　私はアイギーナの島に疫病がはやり、やがてあふれ出てきた、働き者の蟻男を体験しました。
会計　私は今、告げ口をしてしまったために、真っ黒にされた白いカラスでした。
古神　私もあれだ、地獄めぐりをあれして、忘却の河で、自分の記憶をあれして、たった今あれしたばかりでした。
マドロミ　私は、つい今しがた、漁師の男に変わった少女メーストラーでした。
家元　たとえば、こうして私の隣に居るこの女性。
マドロミ　はい。
家元　かつて幻に取りつかれていました、だね。

マドロミ　ええ、弟という幻です。
家元　私が、その病から解き放ちました。
マドロミ　はい、そうです。
家元　（マドロミに）わしは瞑想に入る。後を頼むぞ、隣に座るお前。（目をつむる）
マドロミ　はい。この理想の地、エーリュシオンに私たちがたどり着いた時、私たちはみな病んでいました。人知れず空き地に不法投棄されたのは冷蔵庫ではありません。私たちの人生でした。不法に投げ捨てられた人生。或いは、自ら不法に投げ捨ててしまった人生。この書道教室に入ってきた時は、みんなこんな顔、こんな感じだったんです。（みな暗い顔をする）それが、今はみな少しずつ変身を遂げ、（みな明るい顔をする）本当の人生に近づいています。

書道教室側から喝采。

オバちゃん　（隅から携帯電話で）あなたまでなぜそんなことを言うの？
マドロミ　（携帯電話で）今、わたしは弟の俤なんです。
オバちゃん　こっちの方が、旗色が悪くなっているじゃない。
マドロミ　すいません。私の弟、ここでは優秀だったみたいです。
オバちゃん　えせのくせにね。
古神　え～、ここに押し掛けてきた皆さんは、あれを返せとか、これをああしろとか、おっしゃるが、な。
新人　つまり、家を返せ、土地を返せとおっしゃるが、それらは生徒さん達がその手で署名した契約書に基づいているんですよ。
古神　そう、いわば、あれだ、なんていうんだ？
新人　手書きの契約書です。
古神　そう、その自分の手で書かれているということは、あれだ。
新人　寄附行為なんです。家も土地も正しく寄附されているんです。もちろんこれがパソコンで書かれているのであれば、他の誰かが書いたということもありましょう。でも、これは本人の文字なんです。

家元　（突然瞑想をやめ、目を開けて）は！……では、みなさん、こんな質問はいかがでしょうか？　もしもあなたがその手に受け取るとしたら、手書きの遺書とパソコンの遺書、そのどちらをもらいたいですか？　どちらを信じます？　どちらが命懸けの文字に思えますか？　（会計に）お前はどうだ！？

会計　もちろん、手書きの遺書です。手で書かれた文字に偽りはありません！

生徒たちが一斉に、自分で書いた『信』という文字を、人々に向かって広げる。
そこにいる人間の数だけ『信』という文字が現れる。

会計　人の言葉と書いて『信』です。我々は、この手で書いた文字、それだけを信じているのです。

古神　そう、手書きのあれこそ、信じられるあれだ……。

カーテンが引かれ、再び外部から遮断されていく空間。
大きなテレビモニターが現れる。
たった今の会見の様子が映し出される。
それを、大喜びで見ている家元、家元夫人、古神、新人、会計ら。

家元　おい、もっとボリュームを上げろ。

モニターの中の家元　（突然目を開けて）は！……では、みなさん、こんな質問はいかがでしょうか？　もしもあなたがその手に受け取るとしたら、手書きの遺書とパソコンの遺書、そのどちらをもらいたいですか？　どちらを信じます？　どちらが命懸けの文字に思えますか？

満足げに見ている家元。

家元　どうだ？

家元夫人　素敵。

古神　品がありますね。

モニターが切り替わり、その家元のインタビューを見ていたスタジオの景色に変わる。

モニターの中の女キャスター　下品ですね、この男。

古神　家元には憂いがあります。影があります。

モニターの中の男キャスター　まったく人間としての深みがない。どうしてこんな男を信じてしまうんでしょう。

モニターの中の男ゲスト　クレーテー島へ行って瞑想とか言ってますが、どうせ家族だけで焼き肉屋へ行ってるような男ですよ。

モニターの中の男キャスター　ほらこの画面！

画面が切り替わると、再び録画シーン。家元が喋っている姿の後ろに、焼き肉屋のおみやげを食べている家元夫人と娘たちの姿が映っている。

モニターの中の男キャスター　あ、やっぱり、家族で焼き肉とか食ってますよ。

モニターの中の女キャスター　クレーテー島のミノタウロスとか言ってるけど、クレーテーは焼き肉屋の名前で、そこでミノとか食べているんじゃないですか？

スタジオでの爆笑の声。

モニターの中の男キャスター　どうして若者が、こんな薄汚いデブにひっかかっちゃうんでしょうね。どうせ焼き肉弁当とか今頃食べてるんですよ。

ちょうど、家元夫人が持ってきた焼き肉弁当を食べようとしている家元の手が止まる。

新人　消せ。早く消せ。

家元、焼き肉弁当をそこへ置く。気まずい間。

家元　まったくもって、世界はもうだめだ。どう思う、私の隣に座っているお前は。

マドロミ　お前なら何て言うの？……あんなモノは、冷やかしとまやかしの目です。あいつらは、本当のジャーナリストではありません。

会計　なんだ？　本当のジャーナリストって？

マドロミ　筆一本で、世界を救うことができる。だから、私はこの書道教室に入会したんです。自らの手で自らの文字を書く世界に。

家元　だが、そんなアポローン的な理性ではもうだめかもしれん、あのまやかしと冷やかしを見ていると。

マドロミ　どういうことです？

家元　理性を捨てるしかあるまい、これからはディオニッソスで行くぞ。

家元夫人　何？　なんなの？　ディオニッソスって。

マドロミ　狂気ですね、アポローンの理性に立ち向かう。

家元夫人　知ってるわよ。

マドロミ　ディオニッソス。格好いいですね。

家元　格好いいか。

マドロミ　はい。

家元　（焼き肉弁当を再び口にする）いよいよ、この古代ギリシアの時間も腑分けをすることになるぞ、名無し。

古神　（弁当を必死に食っていて聞いていない）も、もちろんです。

家元　どうやって？

古神　え？　だから、あれ、腑分けって、あのあれですかね、バラ肉的な発想ですかね。

家元　うわあああああ、苦しい。

家元が、弁当片手に、七転八倒。周り慌てる。やがて、けろっと起き上がる。

家元　誰かが、わしを殺そうとしている。

家元夫人　盛ってません。盛ってませんあたし、毒なんか。

会計　でも妻という字は毒に似ていますよね。

家元　体調が日に日に悪くなっている。

家元夫人　本当に、実際には何も盛っていません。

家元　実際にはって何だ。

家元夫人　だから実際じゃないところで、妄想とかあるでしょ、亭主に一服もってやろうって……。

新人　もういいですよ。

家元　どうも、これはあれだな、名無し。

古神　あれですね。

家元　なんだ？

古神　やっちゃいますか。

家元　パソコンってやつがあるだろう。あれを通して、何かがこの書道教室に流し込まれているんじゃないか？　外部から。

会計　手書きでもないパソコンの文字に、そんな霊力があるんですか？

家元　だってパソコンの情報っていうのは、すべて外部から入ってきているんだろうが。

家元夫人　確かに、そこを毒が流れて、今、あなたの弁当に。あるわねあるわね。

家元　リュカオーン達がのさばり始めたな。

会計　なんですか？　リュカオーンって。

家元　この世の終わりに蔓延（はびこ）った一族だ。

新人　どこにいるんです？

家元　さしあたって、あのオバちゃんは、リュカオーンだな、見て分かる。あと、リュカオーン達は秋葉原にいる。
新人　あ、パソコンが好きな奴らですね。
家元　パソコンは書道教室の敵だからな。
古神　あれだ、手書きの仇だ。
会計　ぶっ壊せ、秋葉原もろとも。
マドロミ　そんな、簡単なことなんですか？
家元　あ、あと、スクール水着を住み込みの女たちに着させるように。
家元夫人　え？　どうして？
家元　明日は浅草でサンバのカーニバルがあるから。
家元夫人　え？　言っている意味が分からないわ。
家元　分かったな、解散。

家元去る。生徒たちが慌ただしく何やら用意を始める。

古神　そういう訳で、女性の住み込みの皆さんにはスクール水着を着てもらうことになりました。
女生徒1　え？　どういうことですか？
家元夫人　冗談じゃないわ。あたしは、絶対に嫌だからね。
古神　あなたに着ろとは言っていない。
家元夫人　言ってないの？　でもなんで、スクール水着で踊らなけりゃいけないのよ、私が。
古神　だから、あなたに言っていない。
女生徒2　なぜ、浅草でスクール水着で踊ることが世界を変えることになるんですか？
古神　オーケー、オーケー。
家元夫人　私はオーケーじゃないわよ。
古神　オーケー、もう水着は買ってある。

マドロミ　この時、あんたたちは、もう人を殺していたんだよ。

間。

家元夫人　今、何か変なことを言わなかった？

マドロミ　人を殺した人間たちの口から出る言葉が、スクール水着なの？

新人　何のことを言ってるんだ？

マドロミ　あんたは知らない。

新人　知らないって何を？

マドロミ　私の弟はここで殺された。

新人　また始まった。いもしない弟の話。そのうえ、今日は殺されたってさ。

マドロミ　いるの？　いないの？　いたの？　いなかったの？　私の弟は、アルゴス、アルゴス、百の目玉を持つ男、何を見張っているの？

マドロミ、ふらふらと、窓のあたりまで行く。

一同、マドロミの様子をいぶかしげに見る。

古神　誰とあれしているんだ。

会計　あの女、どんどんおかしくなる。

マドロミ、座り込み、一心不乱にギリ写経『ダプネーとアポローン』を始める。

新人　この場に及んでまだ『ダプネーとアポローン』の写経だ。

古神　もう、アポローンの理性はこの地上から消え去った。そう家元も、あれしてんだぞ。

会計　ここで起こったことを掘り起こそうとしていませんかね。

古神　なんかあったっけ。

新人　何かが起こっていたとしても、起こったことはもうどうでもいい。問題は、起こっていること、起こることだ。我々の修行は今やディオニッソスの写経にまで進んだ。まず全員でそこを書き写す。

生徒全員　ディオニッソスの信女たちよ。お前たちが尊ぶ秘め事を侮（あなど）る敵が、この外の世界には潜んでいる。敵を探し出せ。野に走れ。大地を揺すれ。そして、われらが敵、リュカオーン達を狩りだし、八つ裂きにせよ。そして、悟らせろ。神として生まれたお方を侮った罪を。

新人　これこそが我々のなさねばならないことだ。家元がそうおっしゃっている。

家元夫人　でも、スクール水着を着て浅草へ行けとは書いてないわね。

古神　そこが家元の新しいあれだ。世界をあれするために。

会計　（『信』をみせて）家元を信じろ！

新人　その通り！　これは家元を信じる『信』の文字の行進（信）だ。

次々と、生徒たちが自分で書いた『信』という文字を目の前に掲げる。

『信』『信』『信』『信』『信』……『信』の行進。ディオニッソスの信者さながらの乱舞。

残念ながらスクール水着は出てこない。

その乱舞が続く中、写経をやめないマドロミ。

部屋の隅にアルゴスが現れる。

アルゴス　それ以上、のめり込むな。

マドロミ　え？

アルゴス　あなたの弟にもそう言った。

マドロミ　何のために？

アルゴス　僕は番人だから。

マドロミ　番人のくせに誰にも声が届かない。風邪をひいている番犬と同じ。

アルゴス　あいつと同じ、あなたも自分のコトバを信じすぎている。

マドロミ　なんのこと？

アルゴス　あいつが書いた『ダプネーとアポローン』の話さ。

マドロミ　何を言っているの？　あの子がここで書いたことは、すべて本当のことよ。

アルゴス　ふりじゃないのか、本当に信じているのか？

マドロミ　本当って、本当だもの。

アルゴス　あなたの弟もそう答えた。だから僕は止めた。わざと地獄の窓の桟（さん）に腰をかけたり、そこで地獄を覗き込むふりをしているうちに落ちてしまうぞ。

マドロミ　でもダプネーを追っかけたアポローンの話を追うことでしか、あの子と会える術（すべ）はないでしょう？　違う？　違うの？　わからない、わからなくなったよ。

アルゴスが、窓の向こうに倒れ込む。

狂信的な行進がストップする。

同時に、古神、会計、新人が秋葉原から帰ってくる。

新人　まだあの女、『ダプネーとアポローン』の写経を続けている。

会計　われわれが秋葉原から浅草くんだりまで行って、汗を流している間に、いい気なものだ。

新人　でも、大成功だったな。

会計　家元もお喜びだろう。

古神　あれ～！　あれ～！

会計　誰を呼んでるんだ？

古神　家元を。

家元が出てくる。

テレビモニターに秋葉原を行進する彼ら書道教室の生徒たちの姿が映る。

『信』という文字を手にした狂信的な彼らの姿。

家元　ボリュームを大きくしろ。

新人　美しいですね。

会計　秋葉原中の人間がそういっていました。

家元　あれ？　スクール水着は？

家元夫人　どうしてもあたしに似合わないのよ。

新人　それで中止しました。

家元　なんだよ、もう〜。

会計　でも気分はみなスクール水着で踊っています。

家元夫人　白鳥の湖を見ているようだわ。

家元　わしが考えた振り付けだからな。

モニターの中の男キャスター　なんですかね、この薄汚い踊りとも呼べないこの振りは。

古神　でも、これでかなりの人々に我々の手書きのコトバがあれしたのではないでしょうか？

モニターの中の女キャスター　またまた、このお騒がせ集団がやらかしてくれましたね。

モニターの中の男キャスター　ま、面白いからいいんじゃない？

モニターの中の女ゲスト　私は面白くないな、不愉快だな。

モニターの中の男キャスター　でも笑えるでしょ。このぬいぐるみ……。

画面に家元の大きな顔でできたぬいぐるみを被った生徒たちの踊る姿。爆笑。

そして、あのオバちゃんがテレビに映る。

オバちゃん　皆さんは他人事でしょうから。そうやって笑っていられますが、子供を奪われた私たち当事者は笑い事では済まさ……。

新人　ボリューム下げろ！

気まずい沈黙。画面だけは流れている。

家元　今までのやり方では、この愚かな世界を変えられない。あの外の世界にいるリュカオーン達を、いよいよ本来の狼にチェインジさせよう。

新人　ギブミーチェインジでいきますか。

家元　いやギブミーではもうだめだ。

新人　どういうことです？

家元　キルミーチェインジで行く。

部屋の隅にいたアルゴス。

アルゴス　それは、殺して差し上げるということですか？

家元　え？　なに？

アルゴス　殺せと頼まれたら、殺して差し上げるということですか？　って聞いているんです。

家元　何を聞いていたのかな？　殺せなんていってないでしょ。そんなこと言う奴がいる？

アルゴス　ですよね。

家元の奇妙な様子に気がつく。

家元夫人　あなた？

新人　キルミーチェインジで行くってどういう意味だ？

同時に、『信』『信』『信』『信』の踊る生徒たちの実際の姿が再びなだれ込んでくる。その姿と、秋葉原を行進しているテレビモニターの姿とが重なる。

そして、遂に、『信』『信』『信』『信』……の中に紛れている一文字『俤』という文字を見つけるマドロミ。

マドロミ　いた！　いたわ！　その『俤』の後ろにいるのは、ノゾミ、おまえね、とうとう見つけたよ。

マドロミ、『俤』の文字を追う。『俤』の文字に翻弄される。やがて、その『俤』の後ろから現れるのは、ダプネー。

そのダプネーを追って、古代ギリシア時間の森をさまようマドロミ。追っているうちに、マドロミがアポローンに変わっていく。

マドロミ（アポローン）　待てや～！

ダプネー　待てないや～。

マドロミ（アポローン）　あの長い針は、『君をいとしや』っていう矢。

ダプネー　じゃあ、短い方は『あんたがうとましや』っていう矢よ。

マドロミ（アポローン）　でも僕から逃げれば逃げるほど、そのうとまし矢は、美し矢になるだけ。

ダプネー　何とかならないかな、この口八丁男。

マドロミ（アポローン）　ははは、君こそ誰から逃げているか分かっていないんだ。僕の正体は……。

ダプネー　ジャーナリストでしょう。

マドロミ（アポローン）　あれ？　知ってたの？

ダプネー　ここをルポするつもり？

マドロミ（アポローン）　筆一本でここを変える。それがジャーナリストの仕事だ。

ダプネー　ここを変えるって何？

アルゴス　あいつはここに来た時、そう言った。

ビニール袋が割れる大きな音がする。

時計の針が逆に回転する。

マドロミ　え？　どこ？　わたしはどこにいるの？

アルゴス　僕たちが、鎖で繋(つな)がれた日だ。

アポローンが飛び込んできて、マドロミの位置に立つ。

そのことでマドロミは部屋の隅（いつもアルゴスがいた位置）へはじかれる。

マドロミは、そこで一部始終を目撃していく。

かつての書道教室。

入口には会計がいる。

古神が、大家(たいか)として教えている。

生徒として、アポローン、ダプネー、アルゴスがいる。

生徒たち、筆を取らず一心に紙を見つめ、何事かを念じている。

ダプネー、手を出して字を書こうとする。

その手を、古神がつかむ。

古神　今日はその手をひっこめなさい。

ダプネー　家元も、かつてそうやって私の手をお取りになられました。

古神　わかるかな、筆の震えが。

ダプネー　ええ、そうおっしゃいました。その紙に触れる筆先は、まるで神に触れる指先のようでした。

古神　この筆の震えが、痺れに変わる時、君の人生も本当に変わるんだ。

ダプネー　私は、その家元のオコトバを信じて今日までやってきました。けれども、近ごろのこの書道教室は変です。

生徒一同、一瞬びくっとする。

会計　変って？

古神　筆を使おうとするな、心を使いなさい。

会計　なんで手を出すんだ！

ダプネー　字は手で書くものでしょう。

古神　心で書ける。と近ごろの家元がおっしゃっている。今の心と書いて『念』だ。家元の念を紙の上に写す。それが念写だ。

ダプネー　そんなもの信じられない。念写なんかが見たくてここに来たんじゃありません。

凍りつく書道教室。

会計　念写を信じられないなら死んじまえ！

生徒一同　信じられないなら死んじまえ！

古神　信じる者の、紙の上にだけ言葉が現れる。

生徒１　出た！

ダプネー　え？

生徒２　私の紙にも言葉が現れた。

生徒３　念が写った。家元の念が写った。

生徒１　僕の紙にも念写が起こりました。

生徒２　私の紙の上にも。

次々と、生徒たちの真っ白い紙の上に、『信』というコトバが浮かんでくる。

マドロミ　くだらない！　そんなもの手品に決まっている。ノゾミ、早く立ちあがって、そう言って御終(おしま)いなさい。それで終わりよ。そしてこから出て行けばいいの。腐った果実しか入っていない冷蔵庫から。

アルゴス　その祈りは届かない。すでに起こってしまったことだから。

マドロミ　そんなはずない。ノゾミならば言ったはず。筆一本で世界を救うジャーナリストならば……。

ダプネー　くだらないわ！　こんなもの手品に決まっています。

マドロミ　え？

アルゴス　そう言ったのは、あなたの弟じゃなかった。

マドロミ　どういうこと？

アポローン　もしかして、君の今のコトバは家元批判？

ダプネー　いけない？

アポローン　だったらなんでここにいるの、この書道教室に。僕、君はもっと家元を信じていると思ったのに。

マドロミ　どうしたの？　ノゾミ。ふりをしているの？　私のように。

アルゴス　ちがう。

ダプネー　念写なんて嘘です。家元の魂が紙に乗り移るわけなどありません。

古神　言っていることが分かっているのか。

ダプネー　家元の魂は、今、修行の旅なんかに行ってません。

古神　何だと。

ダプネー　焼き肉屋です。見ました。家族で焼き肉屋に行ってました。

アポローン　だったら、焼き肉屋で修行をしていらっしゃるんだ。

ダプネー　いえ食べてます。

アポローン　仮に焼き肉を食っていたとして悪いのか、ミノを注文しちゃいけないのか。

マドロミ　弟の俤は、何のためにこんなにもむきになって、あの男を弁護しているの？　一体どんなふりをしているの？

アルゴス　ふりじゃない。本当に信じているんだ。

マドロミ　何を？
アルゴス　ここを。ここの教えを。
マドロミ　嘘よ。あの子のギリシアの話は、町に鳴り響くサイレンが始まり。
アルゴス　サイレン？
マドロミ　幼いころ、弟は深夜のサイレンが大嫌いだった。私の袖にしがみついては震えてばかり。それである夜、私が教えてあげた。サイレーンは人魚が船乗りを誘惑する時に出す泣き声。それから弟は、いやなものや怖いものをすべてギリシアの物語に変えた。
アルゴス　あいつは、あなたのコトバの信者だったのか。
マドロミ　ええ、姉が弟をあやすコトバ、その信者。そのコトバがあの子の口からここに持ち込まれ、あのデブに盗まれたの。

フリーズが溶ける。

ダプネー　修行と言って焼き肉を食う魂が、念写されたところで焼き肉臭いだけ。なぜ、あそこには焼き肉を食べる幸せがありながら、私たちだけが修行なんですか。
アポローン　他人のことはどうでもいいだろう。
ダプネー　でも家元は他人じゃありません。私たちから、家も恋人も取り上げて、なぜ焼き肉なの？
古神　そんなに焼き肉が食いたいのか！
ダプネー　あたし辞めます。外へ出て真実を話します。

憤然と立ち上がり、そこを出て行こうとするダプネー。

アポローン　押さえろ、その女を押さえろ。
古神　アポローン気取りのお前。
アポローン　あ、はい。
古神　あの女に鎖をかけろ、逃げられないようにだ。

アポローン　わかりました。
古神　小金田！　家元にどうするべきか聞いてこい。
会計　どこにいるんです？
古神　決まっている。焼き肉屋だ。アルゴス気取りのお前！
アルゴス　はい。
古神　あの二人を見張れ。
アルゴス　アポローンもですか？
古神　二人でここから逃げるための茶番かもしれない。
アポローン　（遠くから）アルゴス、お前も手伝え。
マドロミ　あなたまで何をしたの、その時。

ダプネーに鎖がかかり、アポローンと繋がる。
古神、『地下へのとびら』と大きな半紙に書く。
それが扉となる。

古神　二人で地下へ連れて行け。

ダプネー、地下へ連れて行かれる。
アポローンとアルゴスの手で。

ダプネー　ねえ、私と逃げるためにわざとこんなことしているの？
アポローン　わざと？　何でそんな真似する必要がある。
ダプネー　じゃあ、この鎖は何？
アポローン　君に心底、変わって欲しいからさ。

ダプネー　あなたこそ、どんどんひどい変身を遂げているわ。
アポローン　ひどいって？
ダプネー　ひどい。
アポローン　ひどいと言って理由を言わない方がひどい。
ダプネー　あなたは私を追ってここに入会して来た時、家元がやっていることをひどいと言い、私をここから救い出すとさえ言ったのよ。
マドロミ（アポローン）　救い出すよ。救うつもりよお前を……でもどこに迷い込んでしまったんだ僕は……私も。

アルゴスが鎖を自身の足につなぐ。

アポローン　何やってんだよ、お前。
アルゴス　俺と逃げよう。
アポローン　え？
アルゴス　お前を救いたい。ここから。
アポローン　でもお前は俺たちの番人を命じられているんだろう？
アルゴス　お前こそ、わざとここで地獄を覗き込むふりをしているうちに、自分のコトバに騙され始めた。……君を救いたい。
アポローン　本気か？
アルゴス　本気だ、俺の目を見ろ百個。
アポローン　どの目を見ればいい？
ダプネー　ちょっと、友情だかホモだか知らないけど、向うでやってくれる？　うっとうしいわ。

そこに、古神と会計が下りてくる。

古神　家元からの指令だ、この女を変身させるようにと。お前ら押さえろ。
アポローン　何ですか、これ。

会計　人魚から作られた薬だと家元がおっしゃった。
古神　サイレーンという人を変身させる薬だ。

古神、会計、力尽くで、人魚から作られた薬を飲ませる。

マドロミ（ダプネー）　ゼウス様。この逃げ続ける暮らしを終わりにするために、この川べりで私を消し去り、どうか別のモノに変えてください。
アポローン　本当に君は何かに姿を変えたいのかい？
マドロミ（ダプネー）　ギブミーチェインジ。
マドロミ（アポローン）　君は最後は、僕から逃げ疲れる。そして、大河のそばで、まず激しいしびれが君の両足を襲ってくる。次に、体中の皮が、樹木の厚い皮のようになる。そして気がついたら、河にたたずむ一本の木。ダプネーの樹、月桂樹に変わってしまう。
アポローン　痺れている。
古神　いいんじゃないか？　ダプネーに変わるわけだから。
会計　ここで、はじめて本当の変身が起こるわけだ。
アポローン　でも大丈夫ですか？
アルゴス　これが家元がおっしゃっていたチェインジなのか？　危ないぞ、家元を呼んでくる！
アポローン　これが本当にダプネーの姿なんですか？

ダプネーの呼吸が荒くなる。
ダプネーの死。
そこに放っておかれたダプネーが、起き上がる。誰の目にも見えなくなる。
そして、部屋の隅に残る。

ダプネー　話しかけても聞いてくれない。話しかけられたと思ったら、もう聞こえてこない。これは永遠の拷問。

家元がやってくる。
ダプネーの死体があった辺り、ダプネーの死体を見る。

家元　ダプネーが、キルミーチェインジと言ったんだな。
古神　そう言ったと思います。
家元　それは、殺して差し上げろということになるな。
古神　いえ、殺せと言ったのは、家元です。
家元　俺は、変身させろと言ったんだ。
古神　はい。
家元　何を聞いていたんだ？　殺せなんて言ってないでしょ。そんなこと言う奴がいる？
会計　ですよね。

アルゴスとアポローン、呆然と見つめている。

家元　（アルゴスとアポローンに）お前たち、今何を見た？
アルゴス　人間が殺される姿です。
アポローン　人間が月桂樹に変わる姿です。
マドロミ　嘘よ！　弟が、そんなことを言うはずがない。
アルゴス　（マドロミに）でもそう言ったんです。
マドロミ　そう言ったとしても、いやなことをギリシア神話に変えてしまう、あの子の癖、本心ではないわ。
家元　どっちが正しいんだ？
アポローン　え？
家元　どっちが嘘をついて、どっちが本当のことを言っているんだ？

マドロミ　早く、弟を連れ出して。そしてそこから逃げだして、アルゴス。
アルゴス　（マドロミだけに）できない。
マドロミ　なぜ？　あなたは見張り役ではなかったの？
アルゴス　（マドロミだけに）僕は見張っていたんじゃない。祈っていたんだ。
家元　二人に冥界の闇をかぶせろ。
アルゴス　おかしい。ここで起こっていることは何もかも、アポローン。いや、ノゾミ、お前もそう思うだろう。何故叫ばない！

ギリシア神話の犬たちが出てくる。
アルゴスとアポローンに、黒いビニール袋がかぶせられる。

マドロミ　とめて！　とめて！　あなたたちは元々、飼い主をかみ殺す犬でしょう。由緒ある犬ではないの？　何のためにここに来たの？　この世界にやってきたの？　やめて、ここで終わって、いやな夢は。
家元　もう一度だけ聞くぞ、お前たち二人に。今何を見た？
アルゴス　人間が殺される姿です。
アポローン　人間が月桂樹に変わる姿です。
家元　本当のことを話しているものだけが嘘つきをキルミーチェインジさせろ。
古神　どうすればいいんですか？

家元、『冷ぞうこのとびら』と書く。
その紙を立てると、冷蔵庫の扉が現れる。扉を開く。

家元　そこへ入れろ。後は、二人で決めろ。どちらが嘘をついているのか。

冷蔵庫の中の灯り。

二人、その中へ入っていく。
扉が閉じられる。
うっすらと、冷蔵庫の中の灯りが漏れる、その中で、激しい呼吸のみの人を殴る音がする。
そして、間。
アルゴスが出てくる。無言で、部屋の隅に座る。
マドロミ、理解する。

家元　一枚なのに、なぜ半紙っていうんだろうな。
古神　こんな時に、何を言っているんですか？
家元　その新たなる悩みのために修行に出てくる。
古神　まさか家元……逃げるわけじゃ。
家元　お前、誰に口を利いてるんだ？
古神　いつお帰りに？
家元　しし座流星群が大量に現れるころだ。

家元、去る。
オバちゃんが現れる。

マドロミ　（オバちゃんに）私とあなたはやはり同じ立場なんかではありませんでした……あなたは友達を殺した男の母です。そして私は友達に殺された男の姉でした。

オバちゃん、アルゴスとはまた別の部屋の隅の椅子に無言で座る。

マドロミ　（アルゴスに）これが、弟の末路？……悔しい。悔しいよ。悔しかったろうねノゾミ……（アルゴスに）なんとか言ったらどう？……都合のいい時はもう聞こえないのね。私の祈りも私の悔みも……今、はっきり言える。私の魂胆は、この世の終わりになだれ落ちていく神々の様に、ここにいたお前たちすべてを、その窓から叩き落とすことだ。それが、鬼が棲むとかいう私の魂胆。

袋がパーンと割れる音。

時計が現在に戻る。

そこへ、興奮して戻ってくる会計と新人と古神。

会計　キルミーチェインジって、本当にそういう意味なんだよな？

新人　チェインジは小銭だ。

会計　でも家元が間違っているわけはない。

新人　間違っている！　家元は間違ったことをおっしゃっているんだ。

会計・古神　え？

新人　だからこそ、なぜわざわざ間違ったことをおっしゃっているのか。そのことをわれわれに問うているのだ。

古神　そうだ！　われわれの計り知れないあれの中で、家元は、われわれをあれしていらっしゃる。

会計　そうか。一見、変に見えることもみな、われわれが試されているのだ。

古神　でなけりゃ、お前が窓からあれされそうになった時だって、結局助かったわけじゃないか。

新人　合点がいくな。もはや世界をチェインジさせるには、このキルミーしかないんだ……というか、なかったんだ。そう思う。

マドロミ　キルミーチェインジしかなかったって……どういうこと？

新人　キルミーチェインジしてきました。

マドロミ　何を？

新人　何じゃなくて。

マドロミ　誰を？

新人　あのオバちゃんです。

マドロミ　え？（部屋の隅に座っているオバちゃんを見る）
古神　家元がおっしゃられた通り、オバちゃんを、あれしてさし上げてきました。
マドロミ　あれって、なに？
会計　だから、キルミーチェインジです。
マドロミ　あなたもその、キルミーをしてきたの？
新人　はい。オバちゃんの魂が自ら望んでいたんだと思います。今頃、ギリシア神話の何かに変わることができたと思います。
マドロミ　何に？　何に変わったっていうの？
会計　さあ、古代ギリシアの中に流れる時間は、家元にしかわかりません。

古神、テレビをつけ、その前に座る。

新人　こんな時に何してんだ。
古神　テレビ。
新人　こんな時にテレビ見んのか。
古神　いや、俺たちのことが、あれかなあと思って。

覗き込む会計と新人と古神。
テレビのニュースの音だけが流れてくる。外の音が、そこからだけ聞こえてくる。
「長い間、息子さんを救出しようとしていた被害者の会の代表大熊母子さん（五十四歳）が、数日前より行方不明になっています。こうした一連の事件をうけて、警察が強制捜査に踏み切ろうとしています。関係筋から入った情報によれば、数日以内に捜査令状が発令され次第、内部への突入も辞さない模様です」
こののち、この不穏なニュースが流れ続ける。
突如、古代ギリシア時計が壊れる。
すなわち『大きなのっぽの古時計』と書かれた掛け軸が、

『一』『人』（＝『大』）
『き』『な』『の』『っ』『ぽ』『の』
『十』『口』（＝『古』）
『日』『土』『寸』（＝『時』）
『言』『十』（＝『計』）
と、バラバラの文字になって落っこちてくる。
マドロミも崩れるように消える。
家元と家元夫人が現れる。

家元夫人　どうしたの？　何が起こったの？　大きなのっぽの古時計に。
古神　いえ、これなんです。このバラバラになった残骸があれです。
家元　え？　誰がやっちまったんだ？
古神　私ですが。何か、あれですか？
家元　どういうことだ？
古神　だから、面倒くせえな。
会計　お前、誰に口を利いてんだよ。
古神　家元がおっしゃったんですよ。そろそろ腑分けする時が来たって。
家元　何を。
古神　だから、古代の時間をですか？　たとえば『大』を分解すれば、『一』と『人』？　そんな感じで、大きなのっぽの古時計を、腑分けすると……。
家元　元に戻せ！
古神　戻りません。大きなのっぽの古い時間が壊れちゃいました。
家元　……おまえが壊れちゃったな。
古神　そんなばーかな。

家元　お前というやつが分からない。そうだ、お前を腑分けしよう、古時計のように。おい、あれ。

会計　はい、エレベーターですね。

カーテンが閉められる。

ニュースの音（外の世界の音）が、小さく聞こえつづける。

「なおこの書道教室に入会したことによる被害届は後を絶たず、とりわけ、子供の失踪という顕著な形での被害届が……」

家元　おい、クロノス。

古神　私は名無しですが……。

家元　お前を大家（たいか）にするために、名前をやったろう？

古神　いつ？

家元夫人　また物忘れ？

古神　え？

家元　ここへ入る前は自分を名無しだと思い込んでいた。な！

古神　はい、私は『物忘れ』に病んでいました。

家元　そこで、私がクロノスにチェインジさせた。な、クロノス。

古神　あ、私クロノスでした。

家元　しかも、クロノスは、私ゼウスの父でもある。

古神　え？　そんな光栄な、あれですか。

家元　（ポンと目の前に写経本をなげる）クロノスの写経だ。（会計に）お前も知っているよな。

会計　はい、これは大家（たいか）になるための特練です。やった方がいいぞ！　やれば助かるんだから。

古神　（震えながら）クロノスは、自分のオヤジのちんちんを切り取って、この世を手に入れた最初の世界の大家（おおや）でした。それで自分も、自分の子供にちんちんを切り取られるんではないかと、脅えたあまりに、自分の子供という子供を呑みこんだ神様でした……。

家元夫人　あれ？　もう終わり？

古神　はい。

家元　だからもしも、ここでたくさんの子供たちが消えてしまったのだとしたら……。

家元夫人　まだ、写経は終わってないわよ。

古神　だからもしも、ここでたくさんの子供たちが消えてしまったのだとしたら……。

家元　その子供たちを呑みこんだのは、道端の冷蔵庫ではありません。

古神　その子供たちを呑みこんだのは、道端の冷蔵庫ではありません。

家元　このクロノスなのです。あなた方の子供を呑みこんだのは、この私です……。

家元夫人　どうしたの？

古神　いえ。

家元　この一連の不祥事の責任を負って、私は死を以て……。

古神　助けてくれ。（会計に）お前とは、ずっと町の書道教室のころから一緒だったろう。

会計　でもお前もこの前こうやって俺を窓から放ったじゃないか。

古神　でも助かってるだろう。

会計　たまたま助かったんだ。

家元　あんなに忘れっぽいお前だ、自分の死だって忘れられる。

古神　嘘です。忘れたふりをしていました。そうでもしなければ、何もかも忘れなければ、ここを生きて行くことができなかったんです。私は自分の人生を覚えていたいです。これからもいつまでも。

家元　そうか、物忘れも嘘か、わしをだましていたのか。

古神　すいませんでした！

家元　放れ！（扉を開けて）アプロディーテー、プロメーテウス、大至急ここに来てくれ。

カーテンが開けられ、古神、あっさりと窓から捨てられる。

その瞬間、マドロミと新人が扉から入ってくる。

家元　今何を見た？
新人　ゴミです。
マドロミ　ゴミです。
家元　ついでに、今クロノスが書いた遺書も上から捨てておけ。
会計　はい。

窓の下で、人の悲鳴。そして、落下した古神の周りに次々に人々が集まり事件になっている音が聞こえている。

マドロミ　神々をくしゃくしゃに丸めて、世界にあふれかえったゴミのように捨ててやる。神をかたるお前という神クズを。いえ、お前には、神クズという言葉さえ美しい。お前のために、どんな美しい言葉も使いたくない。

窓の下、下界で騒然とした雰囲気。

「問題の書道教室の古参幹部が、たった今、窓から身を投げ自殺を図った模様です。内部をのぞくことのできない我々には、その詳細は今定かではありませんが……」

同時に、テレビで、オバちゃんの死が報じられる。

「さらにまた、行方不明になっていた大熊母子さん五十四歳の変死体が、自宅付近で見つかり、警察はその不審な死とこの書道教室との関連を……」

「この一連の不審な事件とギリ書道の関連に大きな疑惑がもたれており、これをきっかけに警察は一気に、内部の強制捜査に踏み出す模様です……」

家元夫人と三人のキューピッド、スーツケースを持って現われる。

家元夫人　ちょっと行ってくるわ。
新人　どこへ？

家元夫人　（キューピッドに）ほら、行くわよ、物騒なことになりそうだからね。
新人　逃げるんですか？
家元夫人　誰に口利いてんのよ。家元の命令。修行よ。……でよかったかしら？
家元　いいね。姿を隠す。そういう修行だ。行ってこい。

窓の下、報道陣の前に姿を現した家元夫人を取り巻く音が聞こえてくる。

「一体、中では何が起こっているんですか？」「夫人は責任を感じられないのですか？」

会計　（下界をのぞいて）あのくそリュカオーンども、どうしようもありませんね！
家元　外を消せ、外の世界を消すんだ。
会計　はい。
家元　『リュカオーン』をギリ写経してみせろ、次の女。
マドロミ　はい。……お前が生きていたらどうする？　追い詰められたこいつらをもっと追いつめる？　どれだけそうしたかったことだろう……。
家元　なにを、ブツブツ言ってるんだ？
新人　めっきりひどくなってます。幻との会話が。
マドロミ　この世の終わりは、鉄の時代。そこでは、リュカオーンの催（もよお）すいまわしい宴（うたげ）、荒々しい狂乱が、世界を支配し始めた。
家元　まさに今だ。
マドロミ　あらゆる悪行（あくぎょう）が押し寄せ、恥じらいや真実は逃げ去る。代わって、欺瞞と暴力と、いまわしい所有欲がやってくる。
家元　まさに、外の世界だ。
マドロミ　必要な食べ物だけでは食い足らず、地中の深くにまで、人間の手は伸びる。
家元　飽食の時代だ。
マドロミ　下界の暗がりにしまいこまれていた富までが掘り出され、その富がすべての災いのもととなる。
家元　金がすべてのくだらない時代だ。

マドロミ　血まみれの手が鳴り響く。武器を振りまわし、この世に戦争は絶えず、略奪が生活の手段となる。父は子を守らず、主人は客を守らず、友は友を守らず、夫は妻の、妻は夫の死を願い、他人の国、他人の都を劫掠（ごうりゃく）しあう……大昔に書かれたこの『リュカオーン』の話こそ、今の時代を予言しているとは思いませんか？……お前ならそう言う。

新人　確かに、聖書に黙示録があり、お経に末法の教えがある様に、『リュカオーン』こそギリ写経でのこの世の終わりを教えているんではありませんか？

家元　そうだな、そうだ。

会計　え？　実際に起こるんですか？

家元　残念ながら、すべてギリシア神話に書かれたことは起こることばかり……。

マドロミ　この男の口から出るのは、お前のコトバ、姉が弟をあやしたコトバの受け売り。

会計　ちょっと、あなたしっかりしなさい。

マドロミ　そこでお前はこう切り出す。……では、どうすれば、この世をむさぼるこのリュカオーン達を退治できるのですか？

家元　退治はできない。だから今度は纏（まと）めてチェインジさせる。プロメーテウス。

新人　はい。

家元　筆一本で世界を変えてこい。

新人　はい。火事場の馬鹿力ですね。

家元　そのコトバ、今の心か。

新人　はい。

家元　だったら、今の心を念写してから行け。

その手に傘を渡される。

そして、念写を始める新人。

家元　命がけのパエトーン。

会計　はい。

家元　筆一本で世界を焼き尽くしてこい。
会計　今の心を念写してから。

その手に傘を渡される。
そして、念写を始める会計。

家元　そして、おまえ。
マドロミ　はい。
家元　お前にも命じる。この筆一本で世界を変えてこい、ヘルメス。
マドロミ　ヘルメス？
家元　ヘルメスはアルゴスを殺した神様だ。
マドロミ　私は、そんな名前ではありません。
家元　いや、お前ではない。
マドロミ　家元、誰とお話をなさっているんですか？
家元　マドロミとか言ったか？　お前は、はじめから誰にも見えていない。

サイレンの音が聞こえ始める。

マドロミ　え？……私は、どこにいるの？　サイレンの音が聞こえる。サイレンが私をおこそうとしている。午前八時九分のまどろみの中で見ている、これは幻？
家元　そうだ。お前が立っているその場所、そこにいたのが……お前の弟、お前が追ってきた俤だ。
マドロミ　え？
家元　冷蔵庫の扉を開けてみろ。

マドロミが恐る恐る、冷蔵庫の扉をあける。
部屋の隅に座っていた、アルゴス、ダプネーが立ち上がる。
ダプネーは、自分が殺された場所に横たわる。
そして、アルゴスも冷蔵庫の中の死体として横たわる。
ただ一人、アポローンが冷蔵庫の隅で震えている。

マドロミ　どっちが幻？　お前？　それとも私？

冷蔵庫から弟が出てくる。
そして、家元が手渡そうとしていた傘を受け取る。

マドロミ　……くしゃくしゃに丸めて捨ててやろうと思っていた神々の中に、まさか、お前までが入っていたなんて。お前なの？　お前も、その傘を持ったくしゃくしゃの神々の一人なの？　この窓から叩き落としたいゴミなの？

家元　だから、魂胆はさっさと捨てろと言っただろう。

マドロミ　（アルゴスに）殺されたのは、弟ではない。あなたの方だったの？　（オバちゃんに）やはり同じ立場ではなかった。けれども、ごめんなさい。あなたは友達に殺された男の母。そしてわたしは友達を殺した男の姉でした。

アルゴス、再びゆっくりと立ち上がり、部屋の隅へ。
同時に、ダプネー、古神が部屋の四隅の椅子に一人ずつ座る。

アルゴス　死者がここで見張っていた。もう何も起こらないように。

マドロミ　それは見張りではなく祈りだったの？

アルゴス　死者の見張りが何の役にも立たないように、死者の祈りは何にもならない。死者の祈りは、祈るたびに届かない。だからたとえ美しい母子の星座にしてもらったところで、祈りが届かないのでは、永遠の拷問。

家元　アルゴス殺しのヘルメス。
アポローン　はい。
家元　お前の今の心を念写しろ。それから外へ行け。そして、筆一本で世界を変えてこい。
アポローン　はい。

念写するアポローン、そして立ち上がる。

マドロミ　待ちなさい、どこへ行くの？
アポローン　筆一本で世界を変えてくる。
マドロミ　本当にそう信じていたの？　ふりではないの？
アポローン　リュカオーンがあふれかえったこの世界を変えてくる。
マドロミ　本当にそんなことを信じてしまったの？……小さな筆一本で、世界を救うはずだったお前が……。その筆で何をしたの？
家元　もはや筆で書いていてはだめだ。筆で突け。
会計　筆で突く？
家元　穴を大きくすると書いて『突』く。大きな穴をあける。それが『突』くということだ。
新人　どこに大きな穴をあけるんです？
家元　突くは限りなく『空』にちかい。
アポローン　空を突くんですね。
マドロミ　何を信じて、世界に大きな穴をあけようとしたの？　空を突いても、空しいばかりよ。
家元　我々の空は、そのビニール袋の中に入れておいた。
新人　なんですかこれは。
会計　これはいつか、ダプネーで試したことのある人魚の薬だ。
アポローン　そのビニール袋の中には、人魚の泣き声、「サイレーン」が入っている。
マドロミ　私がお前にだけあげた物語を、姉が弟をあやすコトバを何と無惨な話に変えてしまったの？

アポローン　そして、今手渡された筆一本で突くと世界が変わるんですね。

家元　お前の夢だ。筆一本で世界が変わる。

手前には、マドロミ、そして無言のままの家元。

背後に、地下鉄のプラットフォームが見えてくる。電車を待っているたくさんの人々の姿。

そのプラットフォームに、アポローン、会計、新人の三人がたつ。

マドロミが、三枚の半紙を取りだす。

『俤』『儚さ』そして何も書かれていない半紙。

マドロミ　さあ死になさい。できれば俤になって御終いなさい。儚いものになって御終いなさい。

弟（アポローン）　わかっている、もうそのことは。だから……。

マドロミ　なあに？

弟　これ。最後に、書いたひと文字。これも受け取ってくれよ、僕の今の心だ。

マドロミ　そうね。文字を書いて人を救う、そう思っていた、えせジャーナリストだものね、お前は。わたしにどんな文字を書いて、死んでいくつもりだったの？　死ぬこともできなかったお前が。

弟によって書かれた文字は『幻』。

マドロミ　お前によって、命を溶かされた人たち、たったひと文字さえ、残すこともできずに死んでいった、その人たちに向かって、書かれた文字がこれなの？

弟　ああ……。

マドロミ　なんて、英雄気取りのいい気な文字だろう。

弟　そうだったな……。

マドロミ、黙って、一本の線を増やす。
『幻』は『幼』いという字に変わる。

マドロミ　『俤』の中に残っているはずの、弟はいなかった。『儚さ』の中にあるはずの夢もなかった。ただあるのは、お前の、お前たちの書いた『幼さ』の中にある幻。そして、お前たちの幼い時間が見た幻は、あまりにも無惨だ。お前たちの幼さがあまりにも無惨な時、その幼さが抱えた幻もあまりにも無惨だ。

弟、会計、新人の三人が、白いビニール傘で液体の入ったビニール袋を突きさす。
ゆっくりと、プラットフォームに立つ人々の姿が変わっていく。
苦しそうに崩れ落ちて行く。
苦しむ人々を助けようとする人もいる。
が、その助けようとした人さえも苦しんでいく。
ダプネーが変身したように痺れ、そして苦しみ、静かにそこに横たわっていく。
傘を持ったままの弟、会計、新人が去る。

マドロミ　わたしが月日をかけたつもりの魂胆は、わずか一瞬の幻だった。東京にサイレンが鳴り響く中、午前八時九分、うつらうつらとマドロミが見た幻。お前、何にしがみついていたつもりなの？　それは、神じゃないよ。袖だよ。ただの袖。臆病な幼い心がしがみつく袖。ひとたび神と呼んでいたものが、ああ、神ではない、それはしがみつく袖にすぎなかった。そう気がついた時、その袖を捨て去らない間に、ほんの少しためらっている間に、なんとこの世は歪み崩れ変わりはてることだろう。取り返しのつかないサイレンが街中に鳴り響いた。船乗りを心溶かすほどの音色で誘惑し、しゃぶりつくし、やがて浜辺に船乗りたちの骨を打ち捨てたというサイレーン。午前八時九分、そのサイレンが東京中に鳴り響いた。その時、わたしはまだ弟のしがみついている袖に気がつかないでいた。この物語を知らずに生きていた。……（無言の家元に振り返って）おい、ひと言なにか言ったらどうだい？　冷蔵庫に閉じこもったままの、紫色に凍えた、醜いナルキッソス。

冷蔵庫が開く。中に家元が、隠れ潜んでいる。

家元、徐（おもむろ）に口をあける。

家元　スクール水着が、まだなんだよ……。

マドロミ　こんなコトバを聞きながら、おまえたちは、筆一本で空を突き刺したつもりだったの？……死んだ者たちの祈りは、届かなかった。けれども、こうして生きている者たちの祈りは、なおさら届かない。

アルゴス　だったら、生きとし生ける者たちは、忘れるために祈るのか？

オバちゃん・ダプネー　それとも忘れないために祈るの？

マドロミ　もちろん、忘れるために祈るのよ。でもね、それでも忘れきれないものがのこるでしょう。そのことを忘れないために私は祈るしかない、起きたばかりのまどろみの中で。

（完）